

輪迴因果遺恨
全

091486-000-2

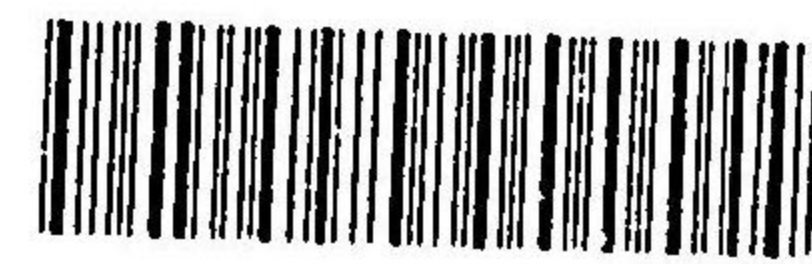
特12-676

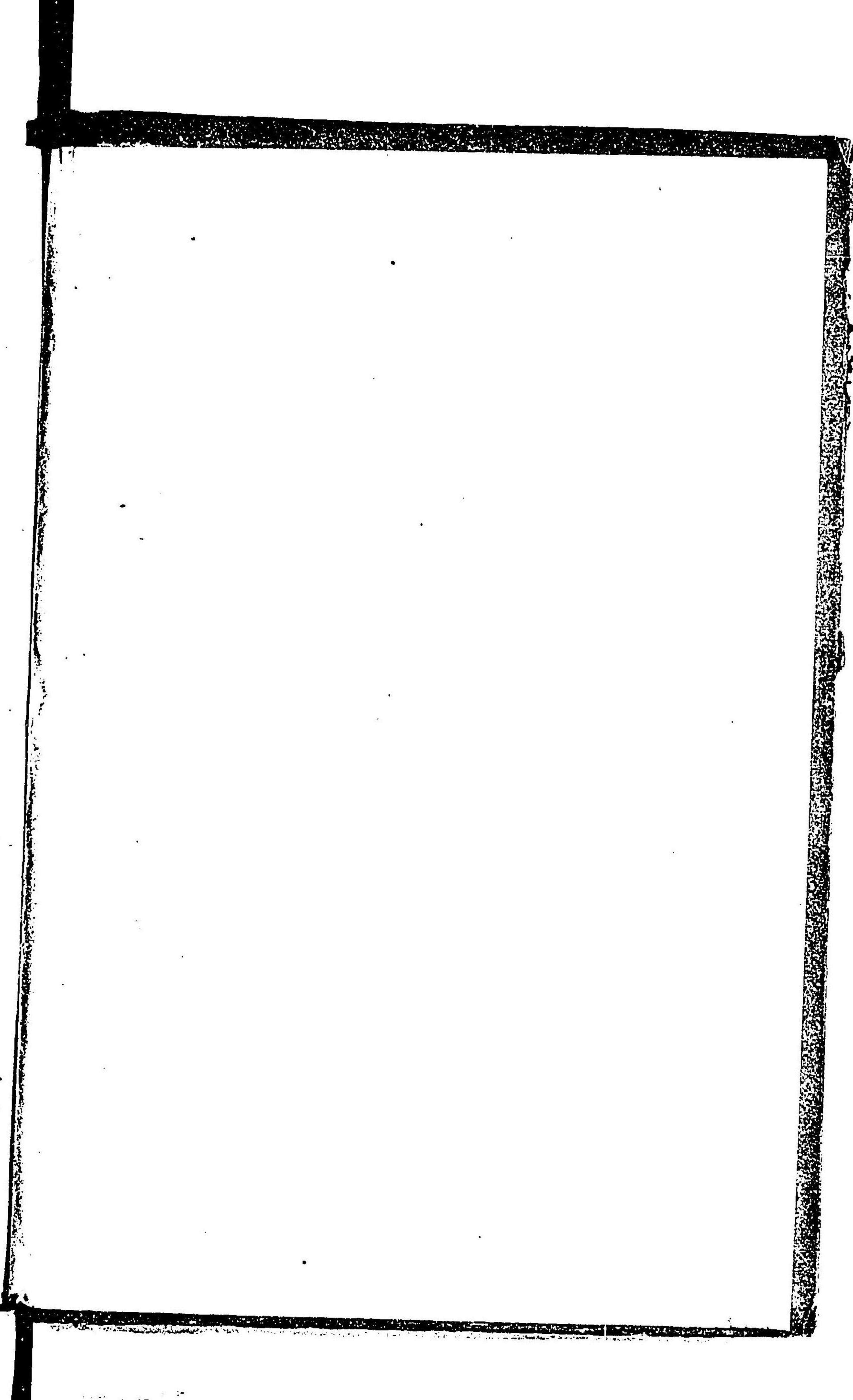
輪迴因果遺恨

柳葉亭 繁彦 / 著

M19

DBN-2455





○輪廻因果遺恨悌緒詞

169

邪正一如善惡不二。迷ふが故に三界常。悟れば則ち十方空。と大恩

教主の教戒を想はば。因果のものたる什麼生。うもさんたやら。小生

物比喩面壁九年を経共。悟得らるゝ事ならねど。

名を異にして齊き者歟。耶蘇にも隆に因と説

き果を示すの説。のりとか。過去の業因未來の結果。現在茲に繁彦

子ガ芳譜雜誌。快筆もて書綴れし新説を例の書肆の需に應じ。

二部の册子に記されれば。巻を開の童蒙がたは。容易因果の道理

を知るべく。又版元は好種を撰て茲に時たれば。彼小車に輪をか

けて。結果をめる福壽海。無量の愛看愛讀を。編者に換て願になむ

明治甲申三月

早梅暗に香を送る處

柳條亭花彦誌



輪廻因果遺恨梯

目錄

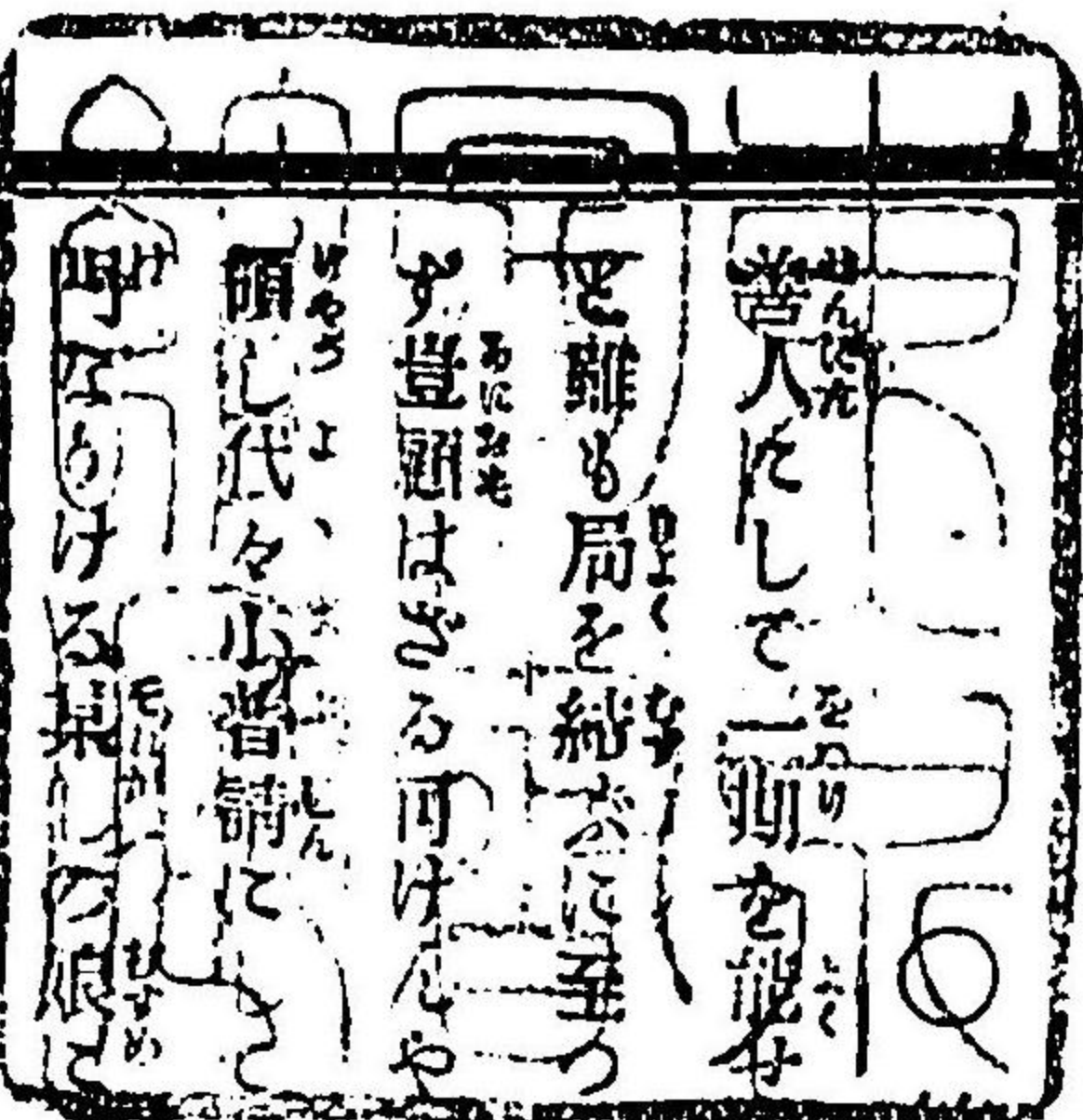
第 一	第 二	第 三	第 四	第 五	第 六	第 七	第 八	第 九	第 十	第 十 一	第 十 二
處女	舊僕	酒興	惡計	忍池	證據	謝罪	神經	溫泉	狡兒	主從	老爺
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
横難	再會	戲行	挿頭	投身	燧袋	黃金	怪夢	首途	懺悔	密通	異見
第 十 三	第 十 四	第 十 五	第 十 六	第 十 七	第 十 八	第 十 九	第 二 十	第 二 十 一	第 二 十 二	第 二 十 三	第 二 十 四
山中	乞兒	茅屋	法師	驛路	師弟	業病	兇者	悔悟	闇夜	因果	孝子
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
狂死	脅迫	奇遇	慈愛	凶報	古語	祈禱	合機	自盡	關爭	關圓	榮達

以上

輪廻因果遺恨梯

第一回

東京 柳葉亭繁彦著



善人たして一期を能く悪人にして富み且榮ふる者を見るるときと天道非なるが如し
 と雖も局を結ぶに至つて善に必ず善報あり惡に必ず惡報あり天網恢々粗にして洩さ
 ず豈難はざる可けんや茲に舊幕の頃嘉永年間の事かどよ小石川春日町に高三百石と
 願代々心普請に其家極めて貧しき穴戸勘左衛門といへる者あり妻のお早は一
 呼なひける某の娘にて天保七年勘左衛門又嫁してより許多の年とおくれども笑
 を嗣ぐ可き嗣子なければ神佛に祈誓とかげ頻り懇請なしたれどもさせる効驗もな
 く勘左衛門夫婦は既に初老の坂を過ぎぬれば今はどて思ひ絶え親族とも談合して
 愛宕下なる同姓某の三男政之丞といへると貰ひうけ谷中團子坂の邊りに住む某し
 の娘おみやといへるを迎へ政之丞が妻と定め此冬願書と奉りて隠居なし、に幾は
 ども無くお早逝りしかば所体盡く政之丞夫婦に與へ名と章山と更めて日頃嗜好

俳諧に耽り月花を友として世と安閑に送りけるが于時嘉永五年春二月の事とか或日
 章山は牛込赤城の社内なる當時有名の俳諧師寶雪菴可尊の許へ到りし歸路築土より
 江戸川へいで夫より隆慶橋を経て水府の表門通りと春日町へ歸らんとはや石橋まで
 來しに川端にあたりて人殺しと二々聲三聲さけぶよと聞ては流石見遣し難く年
 はよれども宍戸章山昔しの手並あらはして悪者どもを退ひ走らせんと其盛腫を引め
 ぐらし一目さんよきて見れば年若なる一人の婦人をおつどりまさ紺着板の奴あまた
 いはずと知れし折助どもが今はや強姦なさんとする必至の場合と見とめしかば
 何かは抑へん驚しぐらゝ走りかゝりて乗りあゝりたる一人の男と引かつぎ地ひ
 ささせてどうと逃げ續いてのゝる今一人の脾腹とてうと蹴とばしたる手なみに
 驚ろく悪者どもたゝんで仕舞へと一同に木刀懸して打てのゝる物くくしやとい
 ひながら腰の脇差とらりと引抜き先に進みし一人の眉間をはたときりつけて返す
 刀は今一人の腰のあたりとグサと突くさしも手練の早業おかなはじゆるせと折助
 ども皆諸どもに逃失たるに章山ハ抜放ちたる小刀の血とば拭ひ聞はしく

鞘におさめて最前より氣を失ひて倒れ居たる娘と頓て抱き起し種々介抱する物から
 娘は此時漸く我お返りて四邊を見れば悪漢どもは逃失て只壹個なる老人の外
 は誰もあらざれば轟く胸と押鎮め章山が前に両手をつき危急お迫りし一期の厄難は
 づかしいめと免かれました謝禮は言葉に盡されませず有難ふぞんじますと身の悦び
 と陳るになん章山は打わらひ絶えて久しき生兵法の今宵はからず役またち和女と救
 ふも何かの因縁何はともあれ長居して再び悪漢らが取つて返さばそハ甚だしき難義
 とならん宿は何づ處か知されと茲を一ト先立距れ事又寄つたら宿許まで我等見送り
 得さすれば心強く思ひねと情も籠る言の葉の大方ならぬ深切に娘はいとどうれしげ
 に猶幾たびか點頭て年端もまいらぬ私しが夜更もいと淋しき道をかくは獨りで
 通行しお急思ひもつかぬ災難に出逢ひましたる其譯も何の事も往來ではと言ふに
 うなづく章山がすましもはやくと先またち元來し方へ十間ばかり立戻りたる折に
 かねてうところに隠れて居しが壹人の折助づかくと窺寄て章山の小刀と鑑としかと
 取り二足三足引戻すを章山すかさず氣合といれ丁と返して柄とかけ抜あんどす

るとぬかしもたてず飛しざり木刀引抜打か、ると物ともなさず章山は驚き恐る、娘をかばひニタうち三打ち空をうたせつとさしりてはたど突くさしも烈し腕力又急所といたく突破られ思はずどうとつまさき倒る、彼折助を見向さもやらすどく此ひまにといそがしたて、娘の手を引き一散又逸足出して追れさりぬ

○第二一回

却説 借も前回到其端緒を繕きし彼章山は其夜さり小石川の堀端で既に強姦せまくせらし娘を救護削りて送りて歸る道中彼が宿所と夜道を掛け寂寥所を通りたる事の次第を尋に元來此娘は金助町又久敷住居る退糧人者の貴島嘉兵衛の娘にて於丸と呼ぶ、者なるが家計の都合で飯田町の某方へ逗留中思ひも付ず三番町の旗本大屋某に深くも戀慕れ入橋架け妾にせんと懇望すれ共親は談合爲るまで無く自分の心で斷言し夫等の遺恨重なりてか從前て屋敷の用を足す彼某も出入と止められ搦て加へて是迄の滞りさへ拂はねば何某しい困却果て兎に角此ま、逗留させては屋敷へ對し憚り有バとことを分解たる話説といひ丸が上より生じたる難義もあれば未通女氣の於

丸は最氣の毒さに翌日ともいはず暇を告げ抑留もさかて立戻りたる途中又起りし殃難の其本末を物語り跡又付つ、急ぐ程に頼て我家お歸る物から親の嘉兵衛に云々と今宵の災難折能くも彼方さまの助けと請け此まで送り賜はりしと章山が深切を言葉短かく説き示すに嘉兵衛は驚き悦びて恭しく此方に對ひ再生の恩を稱へて只管又勇敢武略と賞するにぞ章山は其恙が無と善さ不思議な事よて計らずも令嬢と助し今宵の行合ひ一河の流れも縁とし聞心最前親しく聞取し大屋とやらが葛藤に若しも迫りし事あらば及ばすながら後見と成らん吾儕は茲より遠のらぬ春日町なる宍戸なりと名乗るに驚く主個の嘉兵衛膝と進めて是前より問ひまゐらせんと存じたれと餘り又年齢と召れしゆゑ老の空目と黙止しが借は宍戸の殿様の思ひ掛すと計りにて呆れて暫時詞なき嘉兵衛が顔と章山は從右從左詠めて、と手を打ち寔に汝は我家に召仕ひたる若黨の佐十男にあらすやと言ひて嘉兵衛は頭を下げ袋も冠らず此儘にては面目次第も候はねと今宵不思議よ我娘の事より起り不意別れ程へし殿様にね目に掛も尽ぬ御縁貴邸と辭して故郷なる越後へ歸り商人の元來の手業を営めども重る不幸よ

身と置かね吾子諸共鳥が啼東の空と心的お再び戻る御當地は懸意の者も多ければ人の資力も漸々と細き煙りと立が弓射るより早き光陰を空に送りて此年月絶えて一度も問ひ奉らぬ身の怠りを顧ふにも猶恐多は今宵のお恵みいと面無く候と後脊に汗と斯と聞娘れ丸も打驚き平常父がね噂として好機會あらば少刻なりとも御目通りをせまはしと申し居りしに思ひさや命の親ども見奉る殿は昔しの御主人様おて降て湧たる災難の哀しかりまの親の爲め嬉敷奇遇で候ひしと言ふに章山打ち笑ひ何は兎もあれ健固で居れば夫も越したる事無く我も久しく知る人なれば漫ろも昔しなつかしく言ふ可き事も聞く事も澤なる可ければ閑暇の時屋敷へ來よと主従の隔ても情けいと深き言葉も嘉兵衛は打悦びかへらぬ事を幾度か又言ひ出す主客の問答思ひの外に更闕て夜は早亥中も成りしかを章山と忙はしく後日と契りて春日町なる己が屋敷へ歸りけり

○第三回

茲に章山の養子と成りて其家系と繼續せし矢戸政之亟の奥方お宮との間に權十郎と

云ふ長男と設け實家何某より勝手方の手傳ひと享たれば従前とは違ひ矢戸家も最有福お成りたりと出入町人其外途筋に噂なしたりとぞ案下某生前より引續きたる金助町の退糧人貴島嘉兵衛の娘丸は不思議の奇遇にて親の故主の章山に救護たるが縁となり殊更昔時の縁由もあれば嘉兵衛諸共其後は暑さ寒さの折につけ數度屋敷へ出入毎に當主と始め一同が他事多く款待引留らるゝに泊りて歸るも多ければ自然と足も近くある中或日嘉兵衛は些少なる土産物杯齎して機嫌聽に詣り序次章山始を政之丞等と打向ひ兼て話説申上たる三番町の大屋様が猶よりすまふ付纏ひ不良徒と語らひて娘が他行を窺ひ居ると風の便りも聞きましたので專注意して居る内しかも時昔の雨上りまだ宵なれを氣遣ひ無しと風呂屋へ出し遣りたりしに人足罕き十字街にて誰共知らぬ悪漢も引摺れんと爲られし折節恰好近所の者共が通行して連歸りし事の始末に打驚き其風聞の偽りならぬに今更思へば未始終何様難儀にあらんも知れず先も立派な御身分ある御方様と聞まして互方に間違ひ有ましてもたゞでは濟ぬ當坐の困却夕へ終夜考へまして漸く一ツの手段と得さてころ今日上りしは近頃御無

理のお願いながら不調法なる者なれ共御當家様へ二三年御奉公致させ置き自然と人目に罹らせねば先方迷も其内は斷念のは必定故さうある時は互ひの仕合せ處で甚だ吾儘至極恐れ人升事なれ共便り少く親子の上さうか御察遊ばして此義を願ひ上ますと涙片手の切なる倚頼章山始め政之丞お宮も俱に外ならぬ嘉兵衛が願ひ夫に復か丸が容子舉動も兼て知りたる事なれば皆一同に承諾し汝の都合で何時なりと連て來よとの返答と聞嘉兵衛は太く打悦び其日は其儘歸りしが復間違ひの無ひ中にと竟に其年師走の廿日お丸を宍戸の屋敷へ差出し政之丞の腰元となせしかば當主夫婦も目を掛けて不便の者に思ひしよぞお丸も深く心ろゝ感じ奉公等閑無りしとか斯て其翌正月の末なりけん或日政之丞は實家本多向某方へ到りしよ父母未だ壯健あればこは珍らしとして種々の馳走に甚だ酩酊なし中間小平に手を曳れ吾家へ歸り來りしは兼よとの鐘と突く頃也しが折節一子權十郎は感胃たるの煩悶くお宮の手をを離れぬので事の由と夫も告げ宵より寢室に臥て居り斯れば該夜の介抱はお丸の外よは人氣も無きよ是伴僥と政之丞は四邊を窺ひ筋やのよいつぞは打明け此方の意衷を汝も話説

と思ひ居れども折無て空も過にし此日頃今宵は幸ひ邪魔も無き斯る都合は上首尾なり過般汝が當邸へ治て見し其時より戀の奴と成果し心の内の苦しさと察して呉れよと手と取て引寄せられる政之丞が常平も替る艶語とお丸は悔りせしかども酒が言する戯言と思ひ返して微笑御戯談とと斗りにて取合ふ景容も見ぬざれば政之丞は氣も迫立再びお丸が手を取て強て春情と遂んとする勢ひさながら烈げしきよ始めて太く屹驚なし數なりませぬ私しをヨシヤ偽にも其様に思召し下さるとは冥加も適ひし事ながら御當家様は父親より重ねくし御恩と請け事よは去年小石川よて一期の急難と救りしも皆是御家のお蔭ゆえ吾身よまつはる著藤を拂はん爲めの御奉公も實は少しの御恩報じと届かぬながら朝夕に心と盡す私しゆに最有難き仰せながら若し奥様に知れましての恩を仇なる人非人と御腹立の如何斗りよし奥様が御慈悲深く見て見ぬ振りよ遊むしても夫ではどうも私しの心が第一濟みませぬを御免しなされて下さりませと取ふる手先を振拂ひ遣るとやらじと政之丞か猶追ひ掛る足元も確と蹴く煙草盆向ふへ倒る、音と共に爪行燈をうち消して四邊の忽ちぬば玉の闇となりしと好

機にかゝりながら横側へ出る機会に奥方が權十郎と寝せつけてぼんぼり片手に曲り様此方へ進む出合ひ頭汝はお丸かコハ奥様か折悪し共言はぬ岩せく清水湧かへる涙隠れて憐た、敷髪の亂れ毛揺上ながら已が部屋へと急ぎ行跡見送りて奥方が譯は何共知されどいつに替りしお丸が舉動どうした事と不審く政之丞が居間み來れをコハそも如何灯は消眞暗の坐敷の直中面目なくて政之丞が其儘其處へ手枕の空寝入せま景状と見濟し借はと胸に早起る悵氣の炎を余所よ紛らまゆり起そを政之丞は俄然よ知りたる顔色なし今日は頭人久保氏へ音信たれを歸路に實家へ行て馳走になり不斗酪酊なしたので大層遅く歸邸たが權十郎が小恙は如何在りしと眞顔に問ばれ宮はは、と打笑て思ひの外よ熱も出大さよ心配致ましたたが日の暮前より少しづゝ癒なりましても置かるので今迄一所よ添寐なし御介抱とも人任せ寔よ恐れ入升た此場の仕義と知らず顔なるいと美しき挨拶ふりよ底の心と汲兼し政之丞も何とやらん後ろめだくて他事を語らず此夜は其儘打臥しけり

○第四回

疑心暗鬼と生じ人を害ふ事古今の徹多く精神一ト度紊る、時は迷夢を撥破する事甚だ難と寔なるのな穴戸政之丞が奥方お宮は性來貞順にして道理に敏捷兩親夫によく仕へ此の過誤も無ししが彼貴島嘉兵衛の娘お丸を抱し頃よりして何と無く夫と疑ふ心を生じ自然と舉動を窺ひ居し折も折とて政之丞が酔後の戯れお丸を捉へ強て春情と遂んどせしが却てお丸に訓責られしを夫とは竟に知る由なく茲に一層の炎と増し恨むまじきお丸と惡み如何なして屋敷と追ひ出し後ろ安く成さん物と種々に心と苦しめしが奈ある事と工みけん一日實家の召仕ひ權次といへる若黨をひそかよまねき相談なし、を知る者絶て無ししが其翌日の八ツ頃お宮はお丸と手近く呼び汝も知れる私之の管さし直しよやつたは今月いじめまう出來てゐる頃なれば氣の毒ながらお成道の池田屋までひと走り請取にゆき其かへりにチト道筋は、なれて居れど急な用事のある事ゆゑ私しが里まで此文とどうを届けてくれまいかと譯ありそらにいふ言葉の中間まのせになりぬる内証の事と早くも悟り最う彼是と八ツなれども急いでいつて参りましたら暮ない内よへられませうと事うけなして身じたく

と、のへ獨り屋敷と立いでつゝ貧家に人となりたれば往先を人に問にも及ばず早くも来る御成道の池田屋は六戸の家の出入にて兼て主個も近づきなれを奥方よりの口上とのべ彼かんざしを請取りものんと云ふは折能く出来合ひをればお届け申す筈なる幸ひのお使ひ柄憚りながらおなたさまより宜敷様に奥様へお詫と願ひ上ますと五分程もある珊瑚珠の價ひたつときかんざしと主個の手より請取りて要心深く内懐ろへ確と納めてその足にて直ぐは谷中へ踵を廻し廣小路より東叡山の台下をめぐりて切通しまで來かゝる折節廿年斗りの若漢がお丸に丁と突當り懐ろへ手と差入れしと思ふ間もさく簪の包みを奪ひ駈出すにお丸は驚き聲張上げ思はず盜賊くど叫びながらも一生けん命忽ち追付き若者の袖をとらへて身と震はしいかに往來の稀なり迎女と輕蔑懐中の大事な品とお盗みだが我物ならぬ主人の品茲でお前は取られては歸る端も無し私しの難儀何卒返して下さいと云ふを打消し若者はとられし袖と打拂ひ何と證據に私しをば盜賊よばはりしなさるか此方又知らぬ事なれ其疑はれしは當座の災難さ程私しと怪むなら念をらしに懷中をサア改めて御覽ナセイといふよ

り早、帯ひささ衣類をそこへ投出しうらうそふいて立すむお丸は浩る輩が手早き工と知らざれば袂の中から其外をのこらす見れどもお丸は取られし品の見えざきばわつけに取られ茫然と涙ぐむとば若者の拳と揚て丁々ど力に任せて打のめし罪咎もない往來人よ能く難癖をつけやア勝た思ひ知れよと云ひながら再び丁と蹴倒をして早くも其場と逃去りたりお丸の悔しさ哀しさよ起上らんと身をものがけと蹴られし時に胸腹とバ強く痛めし事なれを我にもお丸は大地に打臥し只さのくど泣ぬたる折しも茲へ來の、るは天王寺の傍りに住む某といふ花賣にて荷を擔ひつゝ、目見れば年猶若き壹人の乙女涙にくれてぬたるにぞ要あるお丸と立寄りていと心切又尋ぬるよお丸はありし次第をはなせば彼花賣の嗟歎なしハ甚だしき災難にて嘸かし口惜しく覺されんが凡そ彼らの手段として神變不思議の手妻と遣ひ見認められし其時ハ却て取られた人を認ひいひ蒐るゝもありぞとよ大方和女が出合ひたるもさる輩と思はるれば今は何とも詮方なし見れば髪さへ打みだし、其身容では往來も御難儀ならんよ幸ひに我身をこゝより遠からぬ天王寺の前町なれば吾家で暫く休息おし氣と

落つて宿元へ歸り玉へと慰められ地獄で佛に逢ひたる如く敷く禮をいひながら
 塵打拂ひ花賣又伴われつ、其家に至るゝ女房も立出て様子を祈りて氣の毒がり夫婦
 彼は介抱なしてお丸が衣類に着たる泥を落しなごして諸どもに眞實しく世話するに
 ぞお丸は大いに悦びながら知らぬ家又長居せんも流石に憚り無きにあらねば人相の
 鐘も音づれて誰か彼かの王魔が時世話に成たる禮をのべ何れ其内改めて必ず尋訪ま
 としますと云ふを主個は打消してナニ之しきよか禮どころか夫より道又氣をつけて
 御出なさいと夫婦の者が心を添る口上を後ろに聞て心細くも彼家と立出で道すがら
 お丸と屹と思案を定め進まぬ足と運ばしつ、忍ぶが岡の此方まで漸くにて去てたご
 り來ぬ

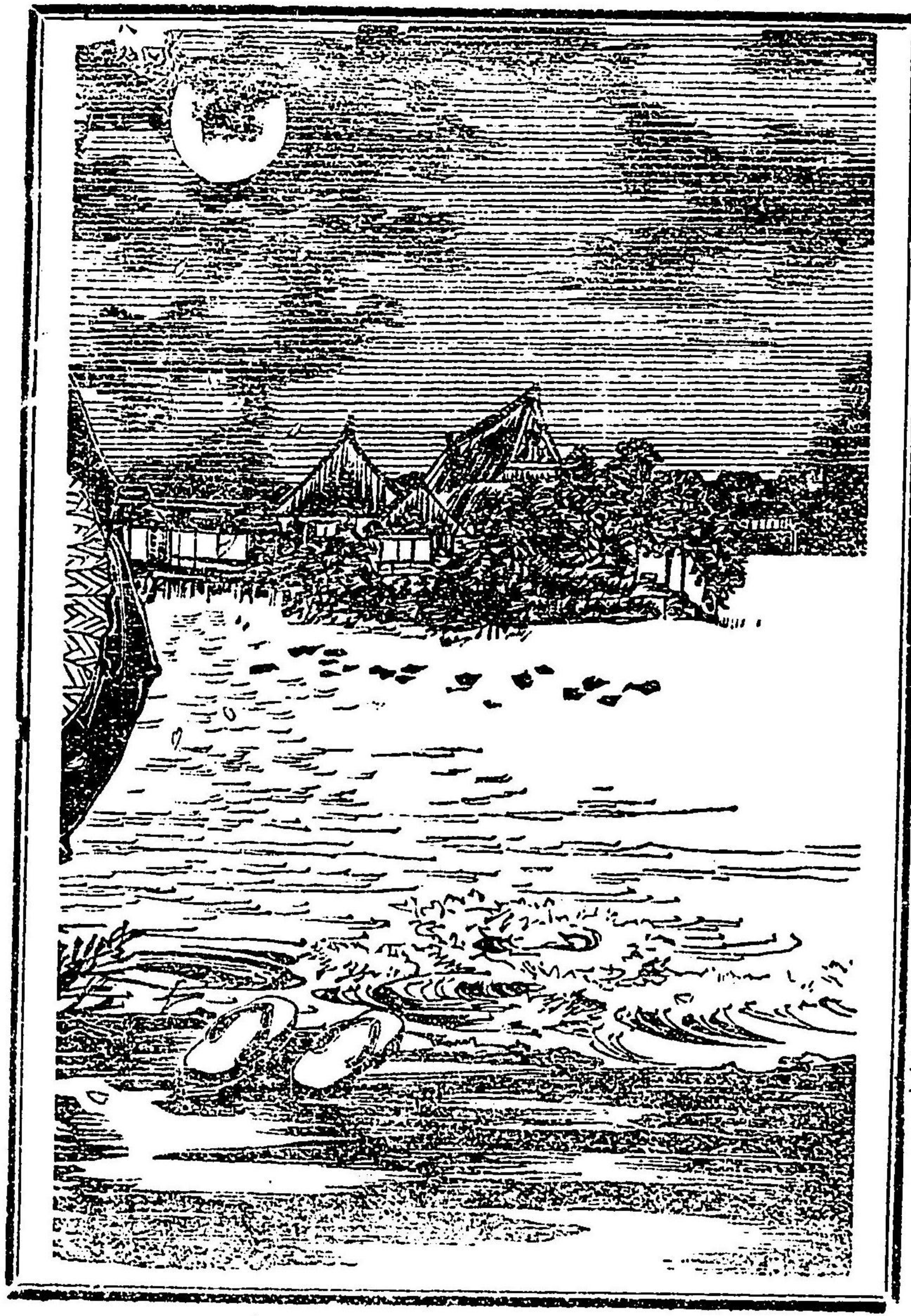
○第五回

東嶽山の櫻は一重なるが故に花信を報ずる事逸早く都下觀花の魁なれば貴賤老若の
 差別無く吸筒行厨杯齎し來て樹の本よ遊び暮し夕闇のたごゝ敷に月侍ハ歸る空お
 き花の影と家路と忘る風流もわり四季折くの快樂も春を以て冠と爲す物は敷島の

大和心に咲出るえならぬ花の有はなる可し今年も(嘉永六年)取分暖和にて東風ろよ
 くど人を吹昨日に今日と諸人の茲に集る花の山見おろす下は忍ばずの池の漣麗
 かに畫ふも及ばぬ好風景未だ其頃ハ辨天堂の華表際より兩側又立列ねたる酒樓有て
 花見戻りの騒客が足と引くさへ多ければ恰も一ツの別世界夜陰も賑ふ其中に北と向
 きたる小座敷で誰が爪弾か三味線の音色も溢き賤機帯「みだれ心のなと逆立てあふ
 ひかづらや黒髪やはどけた儘に櫛取らず歩行ばうつる水鏡其かほよ花面やつれ姿や
 つして派手捨て」といど面白き一節と我身の上にとつかいつ思案に曇る臙月さすが
 人目を忍び駒唄の切端又突出す鐘は無常の響きあり法沫夢幻散り罹る肌寒からぬ花
 吹雪消て行く身も父親の後の歎きの痛ましく一ト足行てハ立止り幾度思ひ返しても
 かへらぬ過失主人と親へ身の潔白の謝罪は死ぬより外又詮なしと覺悟極めて彼お丸
 は伶俐しき常に似もやらず胸又迫りて女氣のやる瀬涙を押拭ひ心細も道傍の小石と
 拾ひ兩袖に確と包みて右所左所と深きわたりと尋ね行處女心がわはれなる柄折又も
 引出す音ハ床敷以前の唱歌「影かくす水よ姿のはてし無き狂女を諫る不狂人祈禱の



1893
K. K. K.



爲の南無阿彌陀佛となふる念佛稱名は三世諸佛の大陀羅尼十方薩埵の脫門なり悟りは迷ひ迷ひは悟りふたつに分て川よどや」と聞ゆる三昧線となふる念佛南無阿彌陀佛と諸共に浪の濺屑と成とする後邊方に一人の旅僧最前方の様子とは窺ひ居りしが此とき早くお丸が帶際確平と執り如何も迫りし絆わり共命と捨て何ふかせん人と救はふ佛の本願貧道が抑留し上からはやはか此儘見遁す可き身は雲水の修行者ながら一河の流れも縁と聞化なまでのきはぬ一部始終包藏説明し給ひなむ及詮方も無らずや愚痴も凝つたる迷ひの夢と覺まし給へど力量のかぎり後邊の方へ引戻されお丸は哀さ恥かしさ何處の人か白浪の泡と消ゆく私しを止めて厚き御教訓それ分別ぬに有ねどもうも私しに故有て主人の使ひに立ながら大事な品と賊も奪ひれ辭柄なさの此投身斯く成果るも宿世の因果と思ひ定めし事なれば見遁し給へと言ひも敢ず修行者の手と振り切て再び岸は足踏掛け南無と一聲水音高く身を轉して飛入るにぞ咄嗟と斗り修行者は慌忙取られ共事はや茲も及びしかば詮方も無愁然と水の面を打詠め何處の者か知らねども年端も行ぬ身をもつて流る非業の死を遂し譯ハ素より知由無れ

と振捨難此場の行合せめてい後世の苦思を救ひ安養淨土へ導かん南無阿彌陀佛彌陀佛と珠散つまぐりて回向あしいざゆかんとて立上れを今まで晴し月影も雨催ひして影暗く夜は漸くは闌て消と渡る風の音も春まだ薄き忍ぶが岡の池をめぐりて吳竹の根岸の方へ立去りたり

○第六回

却説く春日町の宍戸方ふてい當日お宮が釵を請取とまてお丸おば使に遣りしは未刻なりしに日は暮たれ共歸來らずお宮の思仔細も有ば意中より微笑ども章山始政之丞は嘉兵衛に聞し絆さへ有る萬一途中に横難あつて夫故歸ぬ事なるの主人の所用に倣托に自己の用を足採する元來の氣質も有ざれば如何せしやと頼と合せて配慮なすと知事顔も成かねてお宮は中間小平として金助町の嘉兵衛の許へ其音信を聞合に嘉兵衛の驚き大方からお彼中間と諸共に春日町迄出來使に行し原由をお宮に就て聞掛るをお宮はいと氣の毒そうよ由緒とと妾が頼使ひに出た計で汝まで苦勞をさせ寔に濟事なれ共他人にの委任がたき大切の品の絆なれば何の氣も無く出て遣て今更

後悔し升たと御成道の小間物屋池田屋の川を足自分の生家圃子坂へ頼で遣し事柄を
 洩無く嘉兵衛に話説にぞ嘉兵衛は若よりお宮が胸よけりし絆と知らざれば最悪なる
 る挨拶に却て返す詞も無く少選考へ居たりしが私し風情の娘が事であ屋敷へ御苦勞
 計ては濟みませぬは河かの容子を知る爲りに一走り開合せ頼て歸りて其上でまた
 分別もムりませうと言許前短暇を告げ屋敷を立出て御成道の池田屋と云ふ小間物屋
 を極くにして搜索縛りし若頭と打敵き今日未刻に決戸家より注文物の請取に女が參
 りの仕ませぬかき聞て向より亭主は立出で儲かよ御出ま成りまして御誂の品物を直
 ぐに渡し申しましたと感答而已にて穿鑿す可き便宜も無れば是非も無く實は使ひ
 に差出した女が今迄戻らぬので夫で見世へ聞合ふ参りましたは此事件と云ふに亭
 主も驚く顔夫の嘆かしの心配ひか察老申すすが先刻御出の其時は上野の方へお歸
 り成しを暇と存じて居ますれば御目的が有ますなら御尋問なされと深切に氣を付ら
 れて嘉兵衛も亦お宮が實家へ歸りに行と付托やりしと云ひたればヒヨット谷中のお
 屋敷に引留られて居る事やら愛まで尋ねて来た絆なれば序に谷中を聞合さんと寝入

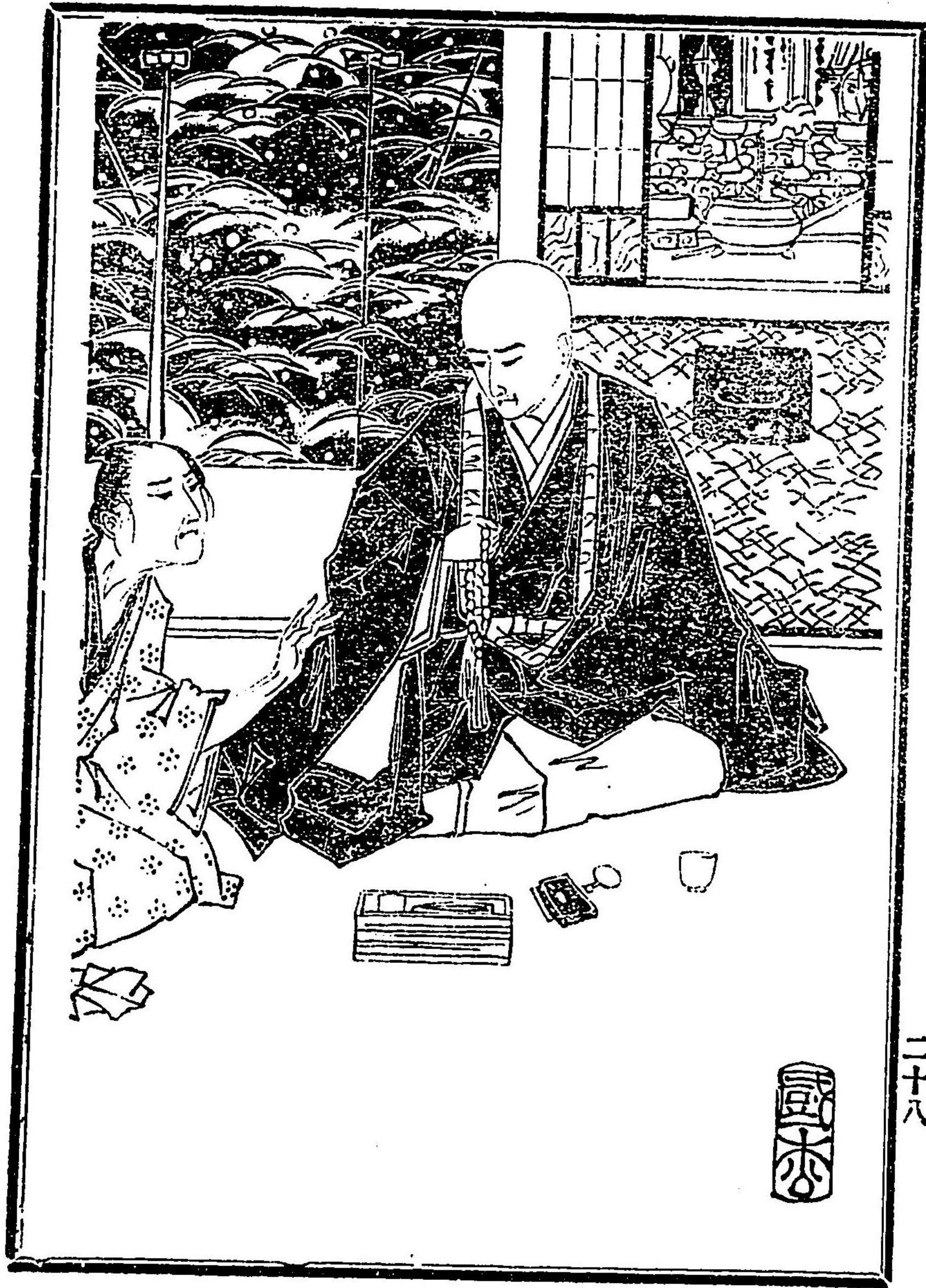
ばなを敵きたる詫を展く云ひ置て其儘谷中を志し辨天前もはや過く穴の稻荷の下
 まで来ると如何機會か前鼻緒が弗と切たに當惑なし懐ろ紙と取出し心無くまゝ池沿
 の柳の株に身を寄せのけ親世よりれば細ながら心もとなく見渡すに宵過るまで雨氣
 を持ち曇りし空も早晚晴れ書にも盡せぬ面白さも物思ひ無き人とは異ひ子故の闇に
 老が身の勢れも厭はず夜る深更人跡絶し池べりや彷彿身に陰なき事と我にもあら
 ず嘆息なし不斗傍らを差覗けば此邊りより身投が有しか未だ新らしき女の駒下駄一
 足並んで在りしおぞ胸よギツクリ思はずも立寄り見ればこは奈に此程おのれがお丸
 の許へ届けて遣し其品に寸分違はぬ様あれば愕然として打驚けどもお丸に限り此年
 まで浮たる事と聊か無く孝心厚き性なれば任せぬ懸に身を措きかね親と見捨て身な
 せと捨るさる森愚たる譯もなし只氣懸りは奥棟の大切な品を恐洩し奪はれ杯して陳
 謝なさに入水致せし事なるか夫か有ぬか夫れとも亦品は似寄れど其主は余所の人よ
 て娘が身には慈が無きや如何にやと思ひ惱みて手は足元何やら光りし物あれば手よ
 取り上て透し見るよ最も古たる火打袋に猶疑ひは晴やらねど後日の証據にならんも

知れずと懐ろへ入れ肝向ふ心は跡に残れども思ひ直して又更に切通しより谷中に出
 でお宮が實家何某の門と敲きて云々と云ひ入たるに下婢の聲にてお使ひ杯は参りま
 せぬとの答辭に頼みの綱も切れ借は何の理由有て身と投たるが實事の有つたか親
 子の縁の盡されば計らず鼻緒の切たるより紀念の下駄と見出させ夫とは無しと知ら
 せしか不便の者やと胸に問ひ胸に答へて立戻る腰は棒の弓張提灯蠟燭も稍や月代と
 共に傾く親子の命運身の行末を案じつゝ心細くもどばくと我家を遙か行越して春
 日町まで来りし頃は早毎戸に一番鷓の聲も聞えて明方と問も無き穴戸の門に至り彼
 小平と呼び起し委細は夜明て再び上り申上ます心得なれを先づ有様ハ箇様くと事
 の次第と物語り憚りながら此通りお取次とば願ひますと詞ばの期を推し我家へまた
 もや踵を廻らしける

○第七回

此日章山は例の俳諧と招待れてお丸が使ひに出行して知らず家は歸りて容子と聞き
 胸安からぬ顔色とお宮と疾くも見て取て親の嘉兵衛へ云々と告遣りたれば嘉兵

衛も来り出先きを唯合め其上でまた詮術も存んとて出行たりしが前回お掲ぐる如く
 弗曉に再び屋敷へ立戻り中間小平へ云ひ置きたる事は彼より直様に奥へ通せし事な
 れば章山の耳にも入りて愈々心中平穩ならず政之亟は又往日夜さり酒興と乗じて
 戯れたる事さへ有れば人ころ知らぬ心に恥ることおはく共に彼是云ひ出て嘉兵衛の
 来るを待うちよ夜の明たるや明ぬ間に嘉兵衛は来りて中間に届けし始末を詳細と落
 無く囁きさて云ふやう一娘が入水の其事山は別に是ぞと考ふ可き手段もどんどムリ
 ませぬと奥様のお品をば若しや途中で悪漢と取られ杯して取逆上死んだ事のと存じ
 られ寔に恐れ入升と云ふとお宮はさりげ無く原因いと推せむ此妾が他行を憚る身と
 知て終慮心くと使に出した夫故起りしこの始末後悔こそすれ何とて又汝やお丸を
 恨まうぞ必ず心配しやんなど心の秘事おし包み表面に色香と添るとい知らぬものか
 ら章山始め政之丞さへ諸共お宮が人をとらさぬと筋かに意中と感せしとか噫此お
 宮はさしも眞實の賢婦なりしに嫉妬の邪念と起し、爲め其事自ら爲さされどもお丸
 をして永く九泉と遺恨と曳せおのれも又輪廻因果に其身と果すされば婦人にして嫉



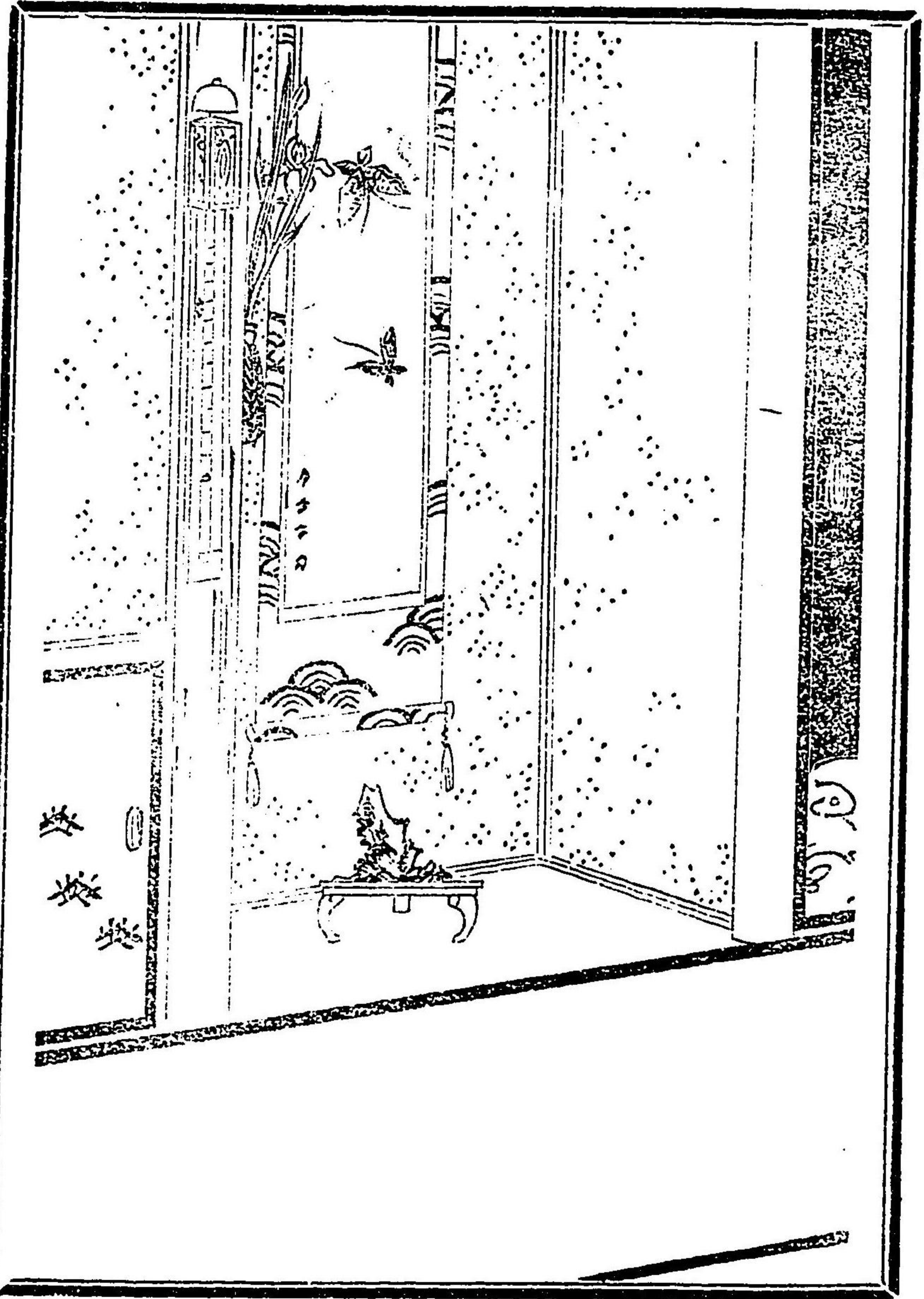
妬の心無き者は去らずと云ふ七去の教へ著るは是は憊る輩のあればなる可し畏可く慎しむべし憊て嘉兵衛は詮方無く屋敷を立いで我家へ歸れど昨日又替る老が身の張りも力も抜果て念佛回向に長き日を爲す事も無く消光うち卯の花降り晴間無き四月下旬となりけるが或日の黄昏旅僧が嘉兵衛の門よりみて鉦打鳴し布施と乞ふに折節お丸が入水せし其日を遠行日と爲る時は七七日の當日なれば嘉兵衛は法師と呼び入て事の次第を打明し回向と依頼に法師の點頭佛問も曳れて讀經しはて懸て嘉兵衛に打向ひ事率爾又は似たれども最前御身が物語られし佛に就て愚僧が方に思ひ合せる事あれば悉一聞せ玉ひねと云ふ嘉兵衛は膝すりよせ思ひ懸ざる御尋問に話説も涙の種ながら佛と云ふは我娘八歳の時より母に後れ男の手して漸くに育て上たる一粒者品行から纏致まで十八並に劣らぬのが却て其身の薄命親の愆目が何一ツ不足の無い者ありしも其身にまつわる災難を防ん爲に或る方へ奉公中に忍ぶの岡でと入水の場所に残したる火打袋の事までも詞短かく説き示しお目も掛るも今日始めての御身が方に思ひ合する事ありとは如何なる事由お候ぞやと答て訝る嘉兵衛を見て

法師は屢々嘆息なし是よりお丸が投身すると一旦救ひとゞめしかども再び池へ飛入て泡と消たる其夜の景況を物語り其娘子の家とも知らず呼入れしは不思議の因縁殊に其場へ落したる火燧袋も御身の手にいる。事の始末は愈奇也と又數回嗟嘆なす法師が今の説話を聞き嘉兵衛は頻り鼻うちかみ姑らく有て其坐をたち納戸に入て行燈とひき提ながら出来り獲え拾ひし火燧袋を法師の前にさし置て寔に今のお説話にて始て聞し枉死の顛末今更歎きは益すもの、斯く詳らるに知りたる上は歎きと止めて後の世の菩提を吊る自己が志望年老ひながら頼むべき我子に後れし宿世の業と滅する仕様ふは先此通りと隠し持たる髮剃にて其髻りと落し、かゝ法師は打見て點頭ながら等しく歎息なす折しも思ひも懸ず門口より一定めなき浮世と風にながむればかつちる花にやどる白露」世とはかなみて出家する嘉兵衛法師も去れ取らせんと一ト聲高く云ふかと思へばと投込む一ト包み封じは切てをらくとわたりお散亂黄金の花共に出たる一通の手紙と取り上げ行燈の灯かきたて讀くだす嘉兵衛が顔と法師もまた最訝かしげよさし覗きぬ

○第八回

話説復舊妓又か宮に何事とか囑托たりと記載したる團子坂の實家（仔細あつて名を詳らるにせ）お雇役はれし權次と稱る若漢は武州川越在なる太田村の農民三藏の二男よしと放蕩無頼の曲者なれを安藏と云ふ兄と只兩個なる同胞あれ共氣質同じからず購と好み色も耽り竟久離勘當と爲つて故郷を放逐しより身の方向も定め無く漂泊て大江戸なる麴町に武家屋敷の元締と渡世と爲そ相摸屋紋右衛門の寄子となり何某の若黨とはなりたるが性質極めて邪智深く其上機轉の能き者なれば飽くまで主人に媚諛ひお鬚の塵を拂ふものから舉家の愛顧も他に勝りか宮も未だ宍戸方へ娶入せざる前方より頼母敷者に思へば社斯る密事と謀議しあれ借も彼權次は或日何某の所用により宍戸の屋敷へ來りしに折能く章山は家に在らず政之亟も今朝疾く他行て三人の下婢の居るのみもる奥の無人を機會にお宮は己れが居室へ招き此程よりの始末とバ最秘密と説示し汝は依屬みしか丸が事思ひの外に入水と聴き一時は吃驚したものの、跡腹惱ぬが意外の首尾併し汝の計較にて彼を陥落せし事柄のまだ判然ぬは氣が揉めて

實は來るのと俟ちましたと云へば權次は點頭ながら四邊と見廻し懷中より手妻の種なる釵と出してか宮の前面に置き一段聲と低くしてか囑托ありし一件は見知り越なる僕にては些妙ならぬ處もあれば山伏町にて名の高ひ熊鷹小僧と味方につけ一幕書た新狂言餘り趣向がたち過て不慮殺生致し升たど云ふにね宮は簪と手に取揚げて傍へに措き豫て心得置きしと思しく黄白若干かを紙に包み筋と與へて復云ふやうこハ言でもの事ながら如斯計議の若一洩れて内外の者も知られては委は素より汝迄身分に關係する事あれば必ず口外せまひぞと臍を鞏固る後日の分別その御疑念には及ぬと其邊に油断はふりませぬと言時玄關で中間がね歸りと呼聲にお宮は權次へ目配せ爲し其座と立せ臺所へ立行姿と見送ながら奥と表の境迄出迎し出る程も無歸り來れる政之丞サア父御のお歸もる御機嫌聽遊せと腰元小教へられ頭是無き兒の可愛らしく權十郎は一室を出父の膝下に這ひ寄るとか宮と顔と見合せて政之丞の打微笑手を曳き立て徐歩せつ臆て奥へと伴ひ入るにお宮は自ら後へ廻り脱せし羽織を腰元に疊ませながら云々と今日實家より權次として使ひにおこせし事評説話しそちあちす



る中日も昏て俱又臥房よりたりたりし四ツ半頃の事なりしが當夜は宵より雨降いで未だ彌生の下洗なれど時候の加減の折々も初雷の鳴渡るに不斗目覺めたる彼お宮は淨手せんとして起出つ雪洞携へ厠へ行しが少遷りて寐所へ戻り再び枕に就かんとすればコハ什麼いかに壹人の婦人が我より先に政之丞と枕を並べて有りしのをハツト斗り胸轟き最審し氣にほんばりの火口と向ふに差付て何者あらんと窺へば緑の髪みどりのかみの匂やかに愛敬づきたる島田の高髻をこやら見馴し様なれば瞳と定めて能く洞見よほら爰も權次が譚めて死せりと思ひし丸なるにぞ呀苦と叫びて後透へ飛び退く機會に手に提る灯りと確とどり落し驚ろき目覺る權十郎の面貌は丁と打當しかばワツと泣出す我兒の灼傷コハ淺間しやと駈寄れば今まで有し女の幻姿は雲の烟りか朦朧と何處とも無く消行しに慌忙き權十郎を矢庭又抱き上げたりと見認まは南柯の一夢にして其身は以前の臥房よわれ共肉は動き胸は騒ぎ頻りにもの、恐ろしければ筋のすねに四邊と窺ふも政之丞も權十郎もともに異状し事も無く最寛容で睡りて居るにぞ少しは心下も安堵と自ら作造し罪業の己れと責めて目前に生憎散見くお丸の容姿我家

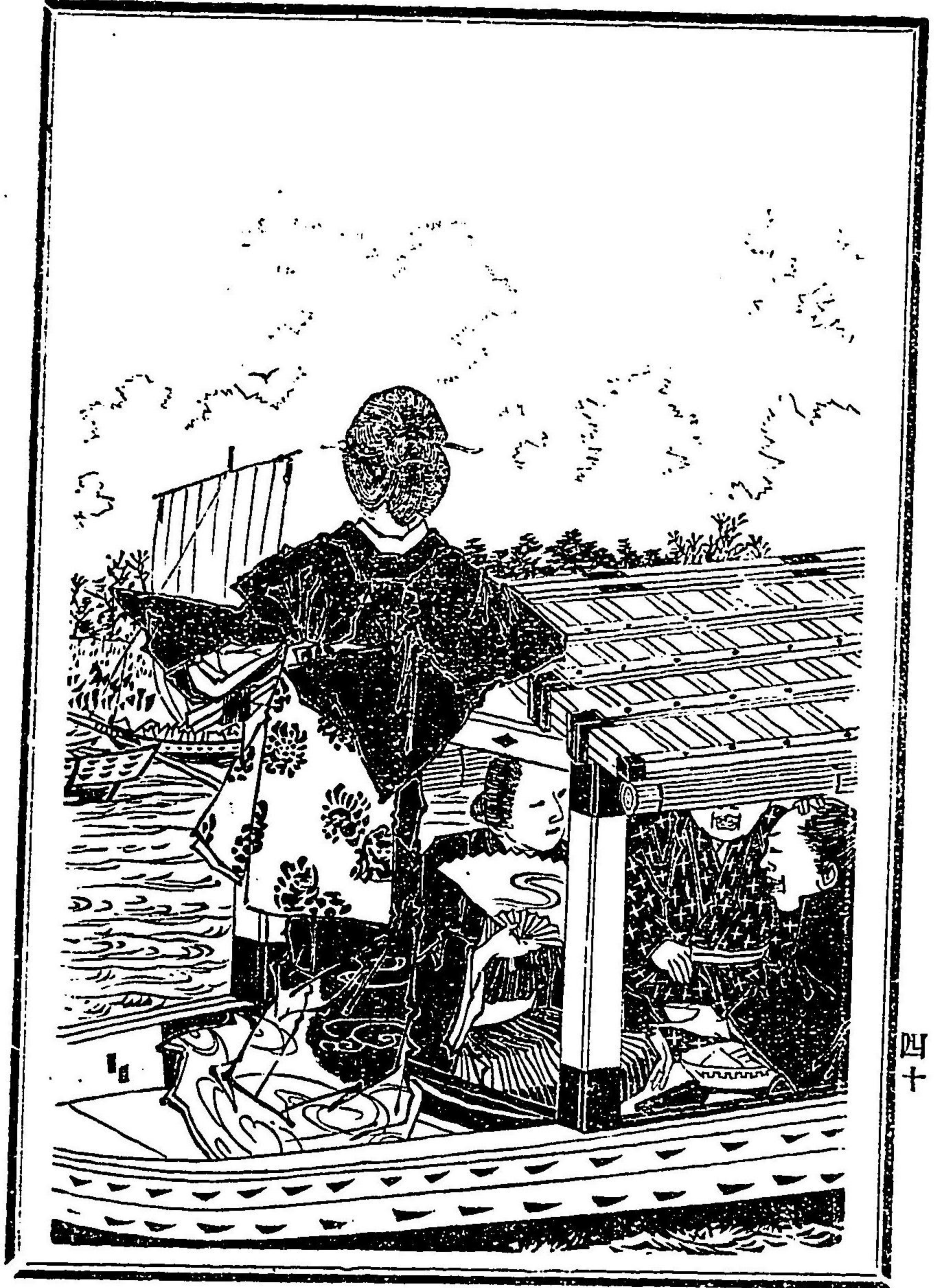
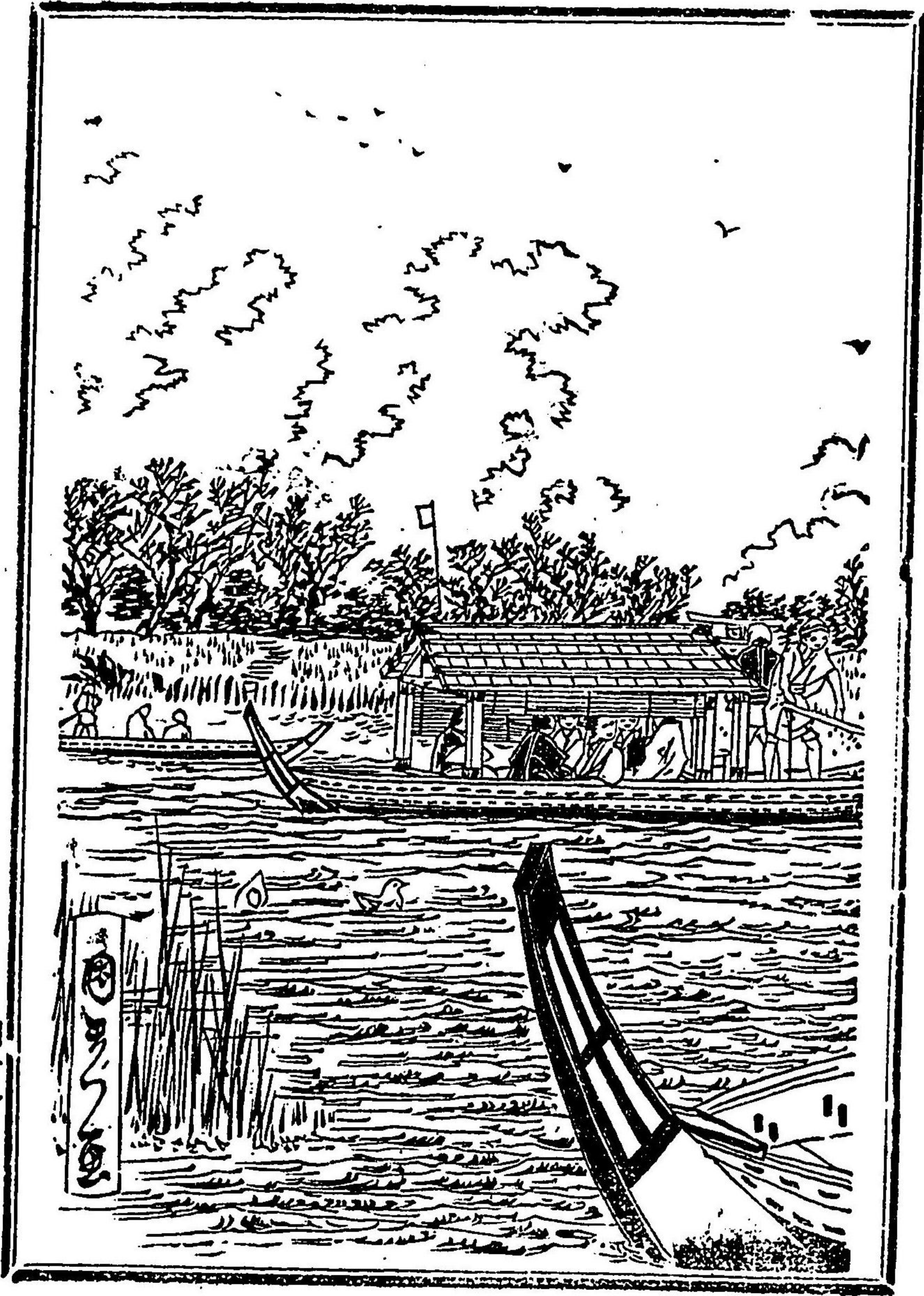
ながら何と無く後春見らる、夜着の裾ぞつと身入む真夜中の風が送りて襟元へ冷りと響く遠寺の鐘陰に籠りてもの哀くまた運び來る村雨の音もみとみて寂莫たり

○第九回

俗も其翌日お宮は夕べの怪しき夢の兎も角心懸るもて政之丞が書齋に在りて書見なし居る處へゆき事の大略物語れ共思ふ仔細の有ばにや定かよお丸が幽霊と見たりし事の告げざるに政之丞は能くも聞ずコハ己れにもお宮へは忌憚よしのわれれば也恠て四五日と経るうち權十郎が頬の上に泡粒程の腫物が出来見る／＼痛く腫上り容体至つて輕からぬも宗族の周章大方ならず其頃神田お玉が池と公議の御匙と勤めらる伊澤盤安と云ふ名醫あれば是が治療を受けたるに失榮とか云ふ難症にて容易も本服をし難しと偵がの國手も首べを捻るに猶一層の苦勞を増し章山并に政之丞お宮も晝夜傍らを少しも離れず介抱せしに醫師の技術の超越たると看護の効の著るしく半月餘り患ひて苦痛は漸く治まれ共生れも付ぬ片輪となり口は斜はきはひさげ世に淺間敷姿になりしにお宮は過晩まぞく敷お丸が姿を見たりと折携へ持る雪洞と落せ

し時に誤まつて權十郎が面部へ打當て、慌忙と抱き上げたりと見しと果敢なき夢なりしが、これか有ぬか權十郎の腫物も面部の上へ出来加旗二目とも見られぬ様になりたりしは若しや丸が怨念の筋か、親子よまつはりて斯は辛き目見するかと思ふ心と言はぬに言で胸のみ焦しつ、憂き日を越え消光とは知らぬ物から政之丞は權十郎の危篤の病苦も薄らきて顔は有しに異れ其命を取も止めたるるれら是らの身祝ひ又親族を集合製應なす事の序次にお玉が池の盤安老とも招きしかを酒宴も果て政之丞は權十郎が治療と勞ひ猶將來の盡力を只管依頼又盤安老は其經驗せし事蹟を舒て憐る難治の奇病には温泉に浴すと最も可とと遮莫行程何れの地も皆是廿四五里も有れば路次の御都合如何あらんの猶能く考案決定玉へと言れし事さへあるをもて争で湯治と爲まく思へを行程さまでに近からぬ他郷へ放ち出さんも流石に憚り無きにあらねば奈よせばやと思ふよしを泰山章山に物語るに何事も彼が爲まり老て別段世用無き吾身付添ひ赴じらば氣遣ふ事もある間敷にさのみと思ひ惱ますとも疾く旅立の支度をせよと異議無き言葉に痛く悦び然は迎一時に調度と揃へ權十郎は未だ母の乳房

を離れぬ小兒なればお宮の素より下婢壹人外にはお宮が實家なる何某方の若黨にて心決たる彼權次を供よ召連れ小石川の屋敷と出立なしたるは卯月始めの事なりける説話分頭緒も政之丞は權十郎を出立させた當日より豫てお宮が計較て其實家より呼び迎へ留守の間だの取締りに雇ひ置たるお會與と云る老女に萬事委任徒然と佗る氣保養も中間小平を伴ひて或日屋敷と立出つお茶の水まで來たりし時恰好出遭ふ一群は自己が武藝の朋友なる皆旗本の二三男或ハ諸藩の家人ども彼是渾て七八人各々穴戸又會釋して何處へ赴き玉ふと言ふ家族が旅行の留守中なれば路次の過誤無らん様夫を祈念の爲め保養をかねて淺草寺へ參詣せんと思ひたら小川町まで用事も有ば夫を濟せて來らしなりと言ふに衆皆笑齒に入り夫は又意外僥倖なり我ハ其も好美日と空に消光も本意ならねば金龍山より向ふへ渡り青葉の蔭より子規の其初聲も聞まほしく斯は打連出途たるなるも照會して賞賤もまた同じ筋へと赴き玉ふは愈々以て興深からん誘玉へ同行せんと言はる、儘も否とも言はれず政之丞は小平よこの大概を言ひ含め屋敷へ先へ歸して措き自分は衆よ打連られ笑ひどよめき歩行うち早



晚淺草へ來たりしかば地中を廻りて興せし後はより土手の薬櫻見んよは船ころ最
面白のらんどかねて馴染の花川戸の大和屋へ云ふ船宿より屋根船一艘と注文して程
無く堤へ漕ぎ寄けり

○第拾回

分解不盡に筆と止めし彼突戸政之丞が一行の既に川中へ乗出し興闌なるに及びて
更に堤みへ漕ぎ寄せ或る割烹家の二階まで又宴席と開きたれば該日も漸く傾ぶさて
各自互ひは挨拶なし袖と分ちて歸りしは彼是五ツ頃なるべし政之丞は假初の他行の
途中朋友は誘はれたる遊歩あれば屋敷の事杯氣に懸り別る、と直ぐ脚を早めどつか
は來か、り枕橋を稍や渡らんと爲す折しも夜陰ゆゑ確乎とと解らぬと未だ年若き一
人の漢子小腰を屈めて親ひより斯ふ唐突に殿様へ申上るも面伏ながら突戸の御前と
豫てより知つて跡のら參りしも現は出来ぬ密事のお説話筋に耳へ入置きたたと云
ふに訝る政之丞笠の裏より透し見れ共素より知らぬ男ゆゑ人違ひよは非ずやと思へ
と儘に我が苗字と知りて聲かけ抑留しは必走要ある事ならんよ先づ其方は何者にて

何等の事を告んと云ふか一切思ひ辨まへすと云ふと打聴く彼漢子は前邊後邊見廻し
聲低め其御不審は御道理何をか隠しまうしませう熊鷹小僧と綽名のある巾着切で
ムひ升と云ひつゝ、猶も政之丞の身邊へよるに驚きながら其盜賊が何用あつて我を引
留め何と云ふかするぞと問ふ漢子の點頭つゝ、重ねて聲とひそましなから斯ふ打付し申
まてはか解り悪ひ筋なれども原來小人は坂本で少しは人おも知られしもの、悴と生
れしものなれど品行の悪るさよ勘當されて年が年中候路つゝあるさ果ハ善からぬ名
が立て到底圍圀へ行き一層度量が強く成て赦免の以降も巾着切の馴た稼ぎを去て
いる裏賭博の臺場で懇親よなつたは尊公も御承知の谷中の權次と説話がおい兄弟分
に成た末或る日權次が依頼により尊公が目を懸らるゝ、丸丸さんどろ云ふ方の懐中
にある簪を盗んだばかりで其人は辭柄なさに忍ばずの池へ身を投げ死んだとやら跡
で噂に聞きたたが原因は奥様がお指揮なされて權次に此狂言と書せたよし其
口留の香代は權次と貳人山わけは澤山お金を頂きたれど茲は情考へれば恚る悪事
に一味れるも皆自己が不身持から割出したる罪咎と潔然心を轉倒て實着よのへる罪



滅しよ尊公のお耳へ入置きたいと希望た念が漸く届き思ひもつかぬ此土地で先刻ち
 らりとお見懸まうせと御同伴のあるに遠慮して故意彼所此所彷徨とりお歸り道を待
 受けて偕こそ聲と懸けましたと流る、水の激みなくいと爽やかに演しかを最前より
 して聞毎句に驚き呆る、政之丞は説話と残りず所了りおもひ當りしお宮が振舞合點
 ゆかじと思ひしが偕は過つる春の頃酒興に乗じて戯れたる其場の容子に邪推を廻し
 咎無き彼を人水させし非道の策と施せしかコハ淺間まと思へ其終見しらぬ男の片
 言うのく然とも思われねば聞が如きは此方にも思ひ當りし事さへあれを見ず知ら
 ずなる其方が我と実戸と知りしも不思議今亦演し詐偽の次第も正しき證據のなき物
 と豈一旦誠とせんや果して詞にいつり無くば證明となすべき品などあるかと詰
 れば男は莞爾と打笑み證據と申すは此一通また私しが殿様を豫て見しれる其譯は權
 次の方へ出這入折恰好尊公がお出に成あれこそ當邸のお嬢様がお嫁に御座つた実戸
 の御前と其時權次お教へられ夫で覺へて居ますのさと語りて取出す女の文実戸は手
 に執り忙しく封じとくく洩出る月又弱して讀下せば抑はお宮が權次と招き事云

くど依頼し以後开を催促せま手紙を覺しくまがう方なき自筆なれば始めて太く打
 驚き恚る證據のあるからは最早疑念は晴たれどもまだ此上も試みに訊問たき事の
 無きにもあらねば苦じからずは諸共に吾が投す方へ行まじさやと云ふに男は一儀に
 及ばず「然らば殿の御供あし」何の事とゆつくりと「逐一おはなし申しませう」
 と打連だちて鳥が鳴東橋へと差懸る此時邊傍の小蔭より突然と出たる兩個の捕方左
 右等しく熊鷹が双の腕を丁と把り搦め取んと梅さたり

○第拾一回

偕も実戸政之丞が長男權十郎は面部を發せし腫物の爲め盤安老が指揮を任せ祖父章
 山と母お宮上下五人の一行にて上州伊香保へ赴きつ、該地に舊家の聞ねる木暮武
 太夫が家に到り茲にて毎日湯浴させ其間には主従が近き傍邊を見物なす杯浩る裏
 にも面白く立とい無し日と経過るに總じて温泉場の通情よて諸國の人も集まれば
 襖の隔て有るのみにて朝夕顔を合すうち早晚懇意にゐる者あり（編者曰く本回には
 伊香保の地況温泉の奇効等委しく記載爲す積りなりしが楮敷の限りあると以て略せ

り一故に旅情の物憂さと互ひに問つ問はれつして或は詩を賦し和歌を詠み其將基香茶俳諧と好む道もて假初の友垣結ぶも多ければ章山は俳諧の附合運座又招かれて座敷を遠のく夜もあるにか宮は權次と下婢の二人と相手に留守して居れど有聲寂莫しき折節は兼て嗜しめる築紫琴に獨り心を慰めしが今宵も雨のるば降て最哀しき草枕秋ならねども露散て古郷の事わが身の上思ひ續けて搔ならずさし手練の瓜音に聞惚れたりしか後邊の襖をやとら押開けて窺ひ寄來る者あるにぞか宮はあやと胸打騒ぎ琴のひ遣りて見かへれを是若黨の權次もて當夜は宵から感冒ひきたり連衣打被ぎ臥したりしが俄かに思ふ仔細や有けん秘と起出で次の間より窓かき容子を窺ふふ此頃のいざれ無さ誰しも睡たき時なれば下婢も醒すや居睡り居り奥にいか宮が徒然と詫て調ふる糸竹の音色も殊に澄渡るよ折こそよけれと氣もどきめき拔足なしつ今既にお宮が居間へは入あがら偵が恥てや何氣無く御隠居様のお戻りをお待ちなさる、お慰み琴の唱歌は分らねど故郷と慕ふ今の一ト節調ぬ旅路に日を重ねぬ御退屈でふりませうと言ふにか宮は打微笑三週り程の氣組にて江戸とば立て來た事故權

十郎の病氣の摸様により最ふ少しにて此土地も名残りになれば夫程は物憂き事も無れども案じられるは殿様のと云ふと打消しにじり寄權次は四邊と見廻していつぞは打明け意裏とお説話まふした其上で露の情けも被らば男冥利と思へ共名にかふ貴嬢は御主人様か、りや連續家來の身高嶺の花の心ちして空に消光し年月も蟻の思ひの漸く届き今回の御供に立たのは結ぶの神の引合せ今宵は幸ひ物淋く誰に遠慮もムりませねば何卒下郎が張詰し胸の氷りの解くるやう願ひを適へて下さりましとか宮の手と取り引寄る淫りがは敷權次が振舞お宮は呆れて詞も無く暫し見詰て居たりしが取られし腕をふりはどき汝は酒でも過してか主人へ對してあられも無い不義と云ひかけ此妾を捕へて何とする氣ぞと訓責られても一向撓ず口と開いて冷笑ひ是程迄よ心を懸け一旦口を吐露出たれを貴嬢が否と仰有とも素手では此儘引込れぬ次第と申すはお丸がこど「ヤ」「サア夫故よ野暮と云はづと若與様云と色よいお返事を聞せて遣つて下さい升と始めて顯はす兇漢のせつにからみし無体の戀慕應と云ねを其身にも深く包みし曲事あれば流石嫌ども岩橋の夜の契りも絶果し枕淋まき折なれ

は引寄せられし我が袖と強くも拂ひ兼たりしが差うつむきし折しもわれ梢を渉る夜嵐の颯と吹來り燈灯の燈火消へて鳥羽玉の闇と成しと幸ひも怪まら夢とや結ぶなる可し

○第拾二回

男の女と慕ひ女の男を慕ふの造化自然の理に出ると雖其人は太倫有て能く之を制度す若し夫れ制度太倫と紊亂るゝ行狀あらば豈飛禽走獸と其類等を殊別にせんや故に男女道を以て爲ざる配偶を或は華尾野合など輕蔑て之等の淫奔なる者と人皆獸と比す獸の制度を知られを色情は精神と奪はれ倫理と過まる者は人にして人非ず則ち犬猫にも劣れりと約言して斯は嘲けるなり況んや定まりたる夫あり子ある者とや隙隙と切り牆を越る他し人に枕と合し不義の慾界に鐘と恨み鶏を啣ち煩惱の犬追へ共走らず肚裏の猿繫ね共狂ふと定や女に之五障七去など各種六ツか敷敷へ有れども淫奔不義と以て訓誡の第一と爲る由古今人の知る處なり畏れども謹しむ可きは情慾ありかし閑話休題お宮は伊香保に逗留中若黨權次が道ならぬ戀慕は袖と曳れ

しを己も亦包まじし惡事のあれば船舟のいなとも云はず濡れ始て堅く結びし下紐の關と我から許せしにぞ權次は日頃の望みが適ひ嬉しき限り無きをもて内外の者の目と忍び密會する夜の度重なれば戀する者の通情もて意氣相投する處より早晩お宮も悲からず思ひよる瀬と漕ぐ船の風待如き心ちして飽ぬ契りを果敢なむ迄は睦み語るぞ是非無れ儲も穴戸章山は權十郎が面部の腫物も温泉の奇効顯れしにや日一日と快く兼て定めし日限も在り留守の屋敷も氣遣しきに之等の事由とお宮に際し宿料其外家乃者へ心付け迄相應え行届かせて翌々日は此地を程て歸らんも調度何くれ整理ふるに主個と素より此間懇意と結びし者共が交代に問ひ來り名残りも惜み合たりしに夫是痛く夜も更て何の如く章山の側にお宮は權十郎と共枕に就きたりしが此夜も既に丑三ツの漏刻の響は目覺めたる彼章山は四邊を見るに孫と抱きて打臥したる嫁のお宮が臥房に居らず權十郎がすや〜と快然に睡りて居るに若し淨手にや行たりしと思へば其儘枕を曳寄せ再び眠りよ就んとするに唯何と無く肉動き胸騒ぎまていも寐られず枕邊に在る煙草盆と火種やあると試むるは是さへ消しは困じつ、暫

く時と遷せどもお宮の戻り
 来らぬは是亦心懸る物か
 ら我も起出陣へ往んと案内
 知りたる廊下傳ひ下婢を寐
 かする間を過て權次が部屋
 と定めたる座敷の前と過ん
 とするに誰と知らず低語
 と囁く男女の忍び聲コハ不
 審しやと章山が立住りて聞
 了り烈火の如く立腹せしが
 思ひ反して點頭ながら其場
 と去りて用と足し闔へ戻り
 て居たりしと夢も知すや



お宮も亦忍び足して歸さつ
 竊に泰山が容子と見に熟睡
 あしたる体なれば僅に安堵
 て睡臥みけり恚て其翌日朝
 飯喫て後章山は下婢と仰と
 て權十郎を伴いせ近き邊傍
 へ出し遣り俄然にお宮を呼
 近け聲低静して借云ふやう
 此地も居のも今日一日翌日
 は故郷へ出立の間際となり
 て斯く云ば不審と思ふの知
 らね共汝に縁故は有にもせ
 よ最早用無きあの權次幸ひ



彼が故郷と茲より餘り遠からぬ川越在と聞たれば翌日の發途も先達て暇と遣るも仁
 怒の豈ッ汝の胸には如何思ふのママ熟考と思量をせよと思ひ掛無き章山の詞も發と
 恐愕け共素より雄々敷女なれを速くも權次と事故ある事と泰山が知つて夫と無く己
 が心を引見ん爲斯と云ふぞと悟りしかば唯何と無き面色して奈なる事が御意に入ら
 ぬか容子は少しも分りませぬが素彼者は私しが實家に久しき若黨にて宍戸のお家の
 者にも非ず今回の供は召連しも日頃からして忠良く敷氣質も知れて居り升故知ら
 ぬ旅寐の長逗留氣心分らぬ者よりは萬事都合も宜らふと思ふて連し事なれば尊父の
 御意に叶ひませぬ共暇と遣す迄も無く江戸迄召連れ其上で實家へ歸せば夫迄と憚り
 ながら思はれ升がと半分云はせず章山は少しく怒り目に角たて然賢げよ云る、共武
 家の家風も應ぜざる彼に罪あり咎あるからは暇の有無に拘はらず翌日の供に連難
 く开と彼是と云る、時は汝の爲にも成まいと思ふは汝の胸も有らん只何事も章山
 が年甲斐も無き不注意と獨り後悔て納まり難き此場を此儘濟すと想ひ事能く整へ候
 ぬと張ある中お慈愛も籠る泰山が嚴格一言にかみやも返す詞は無畏れ入て居た

りしが面目なげに顔と上げ事を分たる今の仰せに無明の夢の疾く覺て空恐るまき此
 身の不品行惡ひ奴ども思さずして權次にお暇下さるとい彼ののみならず妾まで生涯
 忘却は致しませぬと涙さしくみ打詫て夫も權次と傍り招き泰山の口上云く〜と詞短
 かく話示し假の契りを夢として是より故郷へ歸るとも汝の隨意此家を去りぬ御隠居
 様への申し譯ふは妾も是切り汝の事は弗つり思ひ切る程に惡ふ思ふてたもるなど始
 終を語おみやが咄しにさしもの權次も差當る理の當然に施と可き手段も無れば頻り
 に點頭面伏ながら章山の前ふぬかづき暇と乞ひ何處ともなく立去りけり

○第拾三回

借も宍戸章山は若黨權次も放逐なま終に翌日本暮の方を發足なして故郷に歸る途よ
 は着たれど此回伊香保の温泉よておみやがあらぬ振舞は以ての外的事柄にて彼其
 以前親許に有ける頃より交通居しか右まれ左まれ行末の心元無き事なれば江戸へ
 歸つた其上よて詮すべあらんと我胸に問ひつ答つかみや等を急がし立て來懸りまの
 伊香保の里より二里程も江戸へ寄りたる處にて柏木と云ふ在方あり茲らはなべて山

遣にて木の根岩角多ければ權十郎と背負したる下婢に心とつけながら辛くも歩行ゆ
 かんとするよ奈になしけん草鞋の紐の端なく切斷たるよコハ便無しと傍らの敷の中
 ばに隠れたる最大さある青石よ腰うち懸ておみやに對紐の切たよなをす間俟つて居
 るにも及ばねば權十郎と諸共に一ト足先へ趣く可し我は跡より追ひ着んよ往先の道
 と踏みはづさぬやう心と用ひて疾く往ねと云よかみやいらべなひて然らばか先
 へそろく參り向ふに見ゆるか寺の前でお待まとして居りませうと云ひ置ながら五
 六間先へ往たる下婢よ聲かけ扶け扶けられ籠を投して歩行ゆくと章山は氣支ひなが
 ら草鞋の紐をより合せ其事全く果しかば權十郎らに追ひ着んと立上りさま塵打拂ふ
 よ想ひも掛す籠敷より脾腹をめがけてグサと突く刃よ阿と叫びつも腰の刀に手と懸
 るはどもあらせず肩先と再び丁と切り付つ先づ半身と顯はえて前後を見返り立出る
 兇漢あるよ章山は何奴なれば物とも言とす不意よ仇なす卑怯の舉動覺悟ひるげと深
 疵よも屈する色無く抜合せ切らんとすれと初太刀の深手よ思ふだうと輾轉を彼曲者
 は尻目に懸け冠りし手拭ひ引退くるを只見れば是別人ならず今回の供に召連たる若

黨權次なりけれと章山無念の涙を流し人跡稀なる山中にて人と害る曲者は盜賊なら
 んと思ひしに權次汝でありたるか奈なる事と根よ持て主に連る此方を殺害心に成り
 居つた其事由聞ん疾く云へと血走る眼すさまじく白眼話たる相形を權次は阿々と打
 笑ひ此期に及び隠すも詮無し然らば因縁來歴をゆつくり咄して聞せたひが若しや邪
 広でも這入られては骨折損の草臥まふけ任意次第と聞た迎死んで往くに餘計な重
 荷併し此儘冥土へ遣る土産心で些斗り咄してやると外でも無い實にお宮にはれ込ん
 で折が有ばと思つて居たうら不慮も今度の供よ撰まれしは盲龜の浮木優曇華の得が
 たき時節と語りひ寄り江戸と離れた此土地で年頃日頃の願ひが適ひ嬉しひ夢と結ん
 だのと流石目高く考付れ暇に成た口惜さに愛御身とばらした上思ふ女と引撥ひ生れ
 故郷の川越で生涯樂しむ了簡だど飽く迄無敵の雜言と吐き散らしたる面悪くさ如何
 にせばやとあせれども深疵お肢体も自由にならず去迎むざく殺されんは残念なり
 と思ひしがよろめく足を踏しめて言語に絶たる人非人主人に密通するのみか我ども
 殺害なさんとはい獸に劣りし極惡非道天罰思ひ知り居れやと潑矢と切るよ掬くも請止

其儘付入撲地と切る腕の牙に章山は敢なく其所へ切倒され虚空を掴み苦しむを權次
を足もて胸元としのど踏へて咽喉のあたりへ刃を當る折しもあれ何處ともなく銃丸
の一發づどんと耳元へ響く間も無く飛び來り踏跨りたる權次の胸板堂とばかりに打
抜きたり

○第拾四回

却て説くお宮の泰山章山の差圖に任せて權十郎と脊負したる下女諸共に麓に下り觀
音前又來りしのを茲は暫らく足と止め泰山の來會と待合す如何なしけん時過ても
蔭さへ見ぬねば氣遣は敷猶遠近と見渡して最説しげに立付居りしが餘りに思ひ兼た
れば再び下婢を獎まして草臥足と曳ながら山亦山のやま巡り遙かに高く望みたる樹
々の梢も僅かのうち目の下なる峻嶮道と漸くにきて登り來つ目的なる大銀杏の樹
下まで來たりて四邊を見るにコッソモ如何章山は肩先深く切下られ倒れふしたる傍
らよ若黨權次も打倒れ同じ枕に相果たる意外に出し此場の形相見る主従は胸潰れ面
色忽ち青くなり思はず跡へ引下りまに脊に負れ居し權十郎が早くも見つけて恐ろ

しがり母様こいやと涕泣にぞ下女に仰して後邊へ下らせ震へる足を引締て肩の邊よ
窺ひよる此時向ふの山蔭より土埃りに面は黒み搔垂れたる破れ衣も古き索の帯と
たる同じ扮且の乞兒兩個が左右等しく走寄り一人は矢庭にね宮と捕へ今一人は後ろ
に居る下女と目がけて駈來る其様正しく物取ならんと下女と權十郎を脊負ひし儘慌
てふためき逃出す足元狂ひて樹の根に躓き確と仆る、機會にか、り幾百丈とも量ら
れぬ谷底深く落入たるよ吐嗟と叫びて把られたる双の腕を振拂ひ透を狙つて逃んど
するお宮の前後に立塞り濁たる聲と張上げて伊香保の湯場から跡とつけ此山中で物
せんと示し合して我儕が斯ふ待網を仕懸けたらば否應言ず懐中の金は素より身邊
ぬぎ残らず此方へ渡して仕舞へと言へば一人が語を繼ていくら泣いても喚ても人里遠
きこの山みち所詮叶はぬ處だと度胸と定めて渡まやアがれとね宮の帯も手と掛つ、
引剝の、る無体の脅迫遁れ兼たる一期の浮沈お宮も今は一生懸命右と潛り左りと支
へ少時挑み争ふとさ一トひら高き熊笹の茂みと分て立出る一個の壯士が後邊より携
へ持る鉄砲にて兩個の肩腰うち据ながら怒れる聲とふり立て太平の世の白晝に女兒



と捕へて何とかそる不届至極の曲者とも我目も掛りし上からは一向許さぬ覺悟をせよと再び鉄砲振上げて白眼へ語る乞兒等は左右に退て打れたる肩と撲りつ脊と撫つ弱みで見せず冷笑ひ青天井と笠を着て年中野山を宿となし昔しは着た樽酒も今は此身の肌を掩ふ正銘打たる被殺り貰ふ陶の糞汁辛く世渡る我儕の見込んだ護物で横合から己等も取られて如何なるものかと誇りに自負りて立懸り握り拳の雨霰れ打てのゝるを物ともせで壯士と頻りよ手練と盡し胡蝶に狂う猫蛇の如く一上一下虚々實々乞兒等兩個と打惱ます敵し難くを思ひけん始の廣言引かへて頭を抱へ逃出ると猶通さじと追ひ蒐るに巾いと挟き山間なれを道の往還も差出たる木立も隠れて兩個の姿の忽ち見へず成しかば是迄なりと引返し怯き畏れて佇立居るお宮に向ひ詞をかけ何處のお方か知らねどもお同伴と見ゆる各位が敢なき最期と遂られし其場も去らず悪者の手込めに逢はんとせられたる重ねし災難も嘸御難義の事ならん然はれ彼等は遠退さして最早蔭なく逃失たれば安堵給へと殊勝げに問ひ慰むる深切とお宮は恐怖しく小腰と屈め仰せの通り悪者に取圍れて恥しい愛目を見るべき其所を良か

方よお出逢ひまをし助りました嬉しさと思ふよも猶無端泰山の最期其上よいとし吾兒も底深き谷に落入り生死も知れず搦て加へし旅路の横難お察しなされて下さりませと臥沈みたるお宮の形相盛りい少し過たれと色香は失ぬ遅櫻花も羞らふ美しさに思はず見惚し彼壯士の雄手と雌手を見返りてお宮の側く寄り添ひたり

○第拾五回

少時あつて壯士は猶も言葉と和らげ「承りて驚きいる旅路の御難義お察しを最し痛ましく思ふよなん自個が住家の爰よりきて格別遠くも有ざれば往先の事杯談合して能きに計ひ進らせん誘玉へとて先よ立お宮と頻りに促し立る善か悪のは知らざれ共浩る壯士も出逢ひし未だせめてもの饒倖なりとお宮は悦び連られて覺束なくも行く程に里程僅も壹里と過ず平坦ある土地も出しが茲は一軒の草屋ありて件の壯士はお宮と見返り壁は崩れ柱は斜み見るのげも無き茅屋なれと打寛ぎて憩はせ給へと門の締りを引明ていざとて強て誘ふものうらお宮は程能く會釋なし爐邊も膝を進ませて家の形况見旅らするに鹿猿なんどの草を括し柱も夥多懸け置くは問でも知る

き山狩もて世渡る人と思ひしかバ儘のよ壯と落付て問る、儘に我身の素性夫の名前
 其外まで少しも包まず物語り一日も早く故郷へ歸り夫と告て舅の横死吾兒の生死も
 定めたく猶此上のお慈悲には其邊の事も能きやうよと云ふは壯士は打驚き不思議の
 事よて御目よ懸り我家へ伴ひ進らせしと今まで思ひ居たりしが抑々御身と僕こそ
 逃れぬ宿世の縁なりけん思ひ出れば五歳以前御身と未ば實家なる谷中に居られし其
 頃には我が兩親より親御に語らひ己が家に迎へんとて入さへ入て相談せしよ我より先
 に実戸方へ既よ娶入せらる可き約定整たると以て残念ながら謝絶と云れて夫切中
 絶へし三番町の大屋の悴三五郎とは僕が世にある時の通稱なり借も奇しき對面かな
 と一部始終と物語る話説のうちよりいしと宮の胸よ思ひ當る過し昔しの事共
 に驚き訝り膝摺寄せさる御身分の尊君の何故斯る山中よ賤しき業と營み玉ふり苦し
 からずは事故をおはなしかされて下されかしと云ふに壯士は打熱頭定めて不審に覺
 されん昔しに代る此身の世渡り是にも段々事情あれども弄は寛々とお話説申さん最
 早未刻の歩みも過ぎ殊よ今朝より幾千の道の勞れもお在さんに飯杯炊き進らせんさ

はれ山家の事なれば款待申す物もなく心苦しき事よこそと云ひ懸てとど起懸るとお
 宮は慌て押し止め「思ひ懸けなき御厄介に相成るのみか夫等の事までお心配りが有ま
 しては却て心も安堵させねを不束ながら炊きの事はお任せなされよと自ら起
 て三五郎の止るも俟ず芝折くべ籠のもとへのぞめども小身ながら旗本の家よ育ちて
 厨房の事杯我手に懸し事なければ初く敷て我ながらいと鈍ましく思ふなる可し斯
 て其夜は三五郎の隠れ家に打臥たれども行末越方の事胸に浮びていも寐られず三五
 郎が如何して浩る山家よ只壹人狩人となり世と送るや夫等の譯をも分らず我身故郷
 へ歸らんにも軟弱き女の壹人にての路次の妨げあらんも知れずいかにせばやと打歎
 き常の雄々敷か宮なれ共重ねし愛き事お身さへ心も勞れ果漸くよして睡眠しと
 を然るに其明朝より心地例ならず熱氣強く出て惣身燃るが如く假初の起臥も任せぬ
 程なりと云ふに三五郎も顔と痛まめ此邊は山懐るにて醫師と云者あらざれば伊
 香保へ得行て兎も角も藥を購ひ進らせんよ心強く覺せよと纏て我家を立出しが凡そ
 二時餘りよして忙の敷歸り來つ心の限り勤りて大方ならず看護まにぞ素是一時の發

病にてさるべき症にも非ざれを日數僅かに四五日經て忘れし如く全瘉しにお宮は主
 個の志しを世に頼母敷思ふにつけさしも重なる横難の愛かりし事も早晩に忘る、
 とは無く程立て十日斗りも消光せしが或日主個に打向ひ厚き惠みと被りて御恩返し
 もせぬ中にまたもや御無理の事ながら兼て申せし身の上なれを何卒故郷へ立歸り家
 族の者も落付ますやう御取計ひ下されかしと氣の毒とらに依頼しかば主個は屢く
 頭を搖き佛作つて精神と入ぬといへる但諺もあれば萬端の事と調理へて近きを送り
 參らせんよ必ず案じ玉ふなど答へて其儘日を送るゝ實に遠くして近きもの男女の中
 と書れし如く元來多情のお宮なるに主個が日頃の慈愛に感じいと悪からず思ひしが
 遂に寄邊の岸となり取果さ契りと結びてより遷るに易き淫婦の本性故郷の事や吾子
 の事も氣に懸らぬには有ねども茲も流石に捨かねて妻よ夫と呼び呼れ道ならぬ道よ
 迷ひ入る最も奇しき情狀なり

○第拾六回

借もお宮に從ひて權十郎を背負ひたる下女何某は惡者の乞食よ退はれて谷底へ轉び

落ちしが岩角と木の根に肢体を痛く打其儘遂に息絶えに權十郎は運よくも僅か斗り
 の切疵よて命に恙が有らざれ共稚き者の事なれば泣より外に詮方なく亡しき骸に取
 纏りかろくするぞ道理なる恁る處へ來か、りたる壹人の法師が此体と便なき事よ
 思ひしにや死骸の側に泣臥したる權十郎と刺はりて「如何なる譯か知らざれども人
 も通はぬ山間よ恁て在する訝しさと問へど答へも顔是なき稚な心に哀しさが先立
 つ物から果々敷いらへも得せで在しにぞ屢く問はれて漸く高嶺と見上げて指さ
 し示し、やくりあげつ、泣出す法師はと見かふ見照べて借は女よ負はれ杯して共
 お山より落ちしと思しくさはれ女が相果たれを容子を知るべき便宜もなま何はしか
 れ稚き者を一人爰ら、捨置れんや里へ伴ひ免も角も此子が上と頼みて見んと分別忽
 ち定まりしかば猶様々に説賺し權十郎と背の中よ負ひ死骸に向ひ念佛あし里ある方へ
 趣きけり説話分題借も穴戸政之亟と朋友らに暇を告我家へ急ぐ歸り道枕橋まで來
 たりし時思ひがけなく呼止められて熊鷹小僧の懺悔とき、お宮が若黨權次と計りお
 丸を陥しいれたる始末も例の密書に委敷分り或ハ驚き或は怒り猶聞漏らせし事あれ



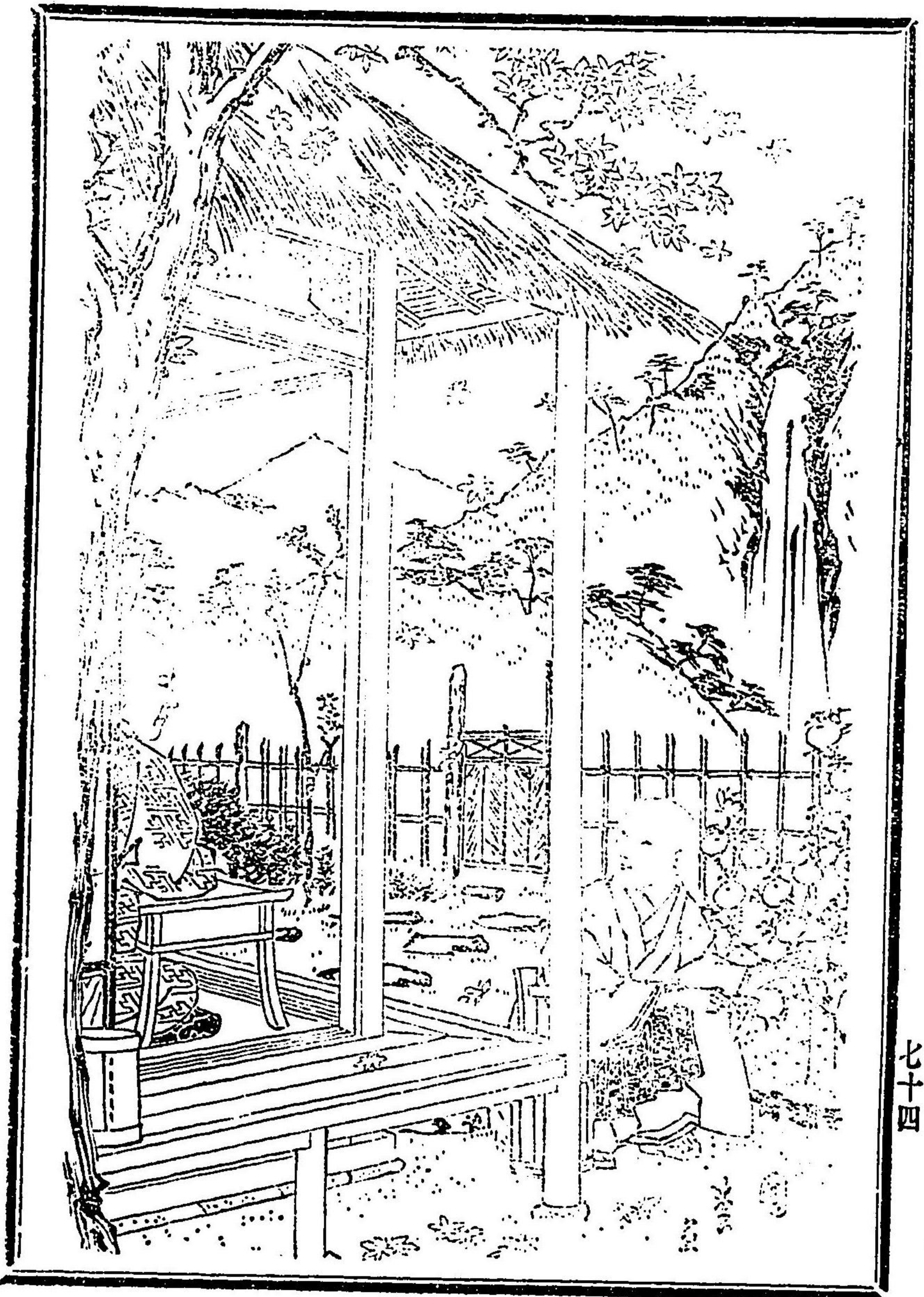
ば一所よ來よと熊鷹くまたかと伴ともなひ來る東橋あづまはしみて借用かかの聲こゑと諸共もろとも熊鷹小僧くまたかしょうが召捕めしとられ引立
 られて行く跡あとと暫しばしし見送り佇立たてましが罪つとめあればこそ其筋すぢのお手に合あたる咎人とがにんならんに
 なまじひ言語ごんごと交渉まじゆるとも却かへつて毛けと吹き疵きずと索もとむる後悔あとがひあらんもそかられずと遺憾ひかな
 からも立歸たてかへり其夜よ己おのれが書齋しょさいに在あつて事の起因おとこりを案あんずるに正ただしくお宮みやが嫉妬しつとに依より罪
 あさお丸たまごに自滅じめつさせしも甚おそろく處ところは已まにありと深く心に悔悟くわいごせしかば其翌あした日の夕方ゆふがたよ
 り屋敷やしきと出て只壹人ただひと筋すぢかにか丸たまごが父親ていふちなる貴島嘉兵衛きしまけいべゑによそあから金を恵めぐんでせめ
 ても身の誤あやまりを詫事わがせんとお丸たまごが狂死きやうじの始末しまつよつきては少すくしく恥はづる事ことあれば僅わずか
 乍なげらも手向たむかの料ねりに此金このかね取とる云いふと書認かきしためて一通ひととほと懐なごろにして赴まむさし壹人ひとの法師ほうし
 と忍しのびやうに打語うちかたらへる話説わなしと聞入きこるにも入いかぬや、暫しばしく門邊かどに在あつて窺うかがひ居ゐり
 しが嘉兵衛けいべゑは我兒わがみの横死わやうじとき、世よを果はなみて彼かの法師ほうしと道師だうしと仰おんぎ遁世とんせなし誓ちか切きりて出
 家けとなる件くだんの始末しまつと聞果きこしければ彼かの一通ひととほに黄金おうごんを添そへ門かどより投なげ込み屋敷やしきへ戻もどりた
 鬱うつくと日ひを送おくるに是こゝより先まに旅立たびだちたる權十郎ごんじちろう等らが伊香保いせほへ行いし日數ひかずも夥おほ多た重かさなり
 て一ひと月つきあまり過すたれをよとの風の便たりも無なく餘あまりに想おもひ兼かねしかば或ある日ひ仲間ちゅうけん小平せうへい

をば近く招まねて我われ想おもふ由よしを示しして伊香保いせほへ行いき權十郎ごんじちろう等の音信おとづれを聞きて來きよとて出立しゅつだつさ
 せしお七八日しちぱちにちと經へて歸かへり來きたり木暮きぼの方は跡月あとつきの廿八日にじゅうぱちにちか出立しゅつだつにあり直すぐ江戶えどへか
 歸かへりに相成あひなりましたと彼方かのよて答こたへし通り又また物語ものがたり詮索せんさくなす可べき便宜べんいも無なれを又一層またひとへ
 の苦勞くろうを増まし心こゝろならずも日ひと消光しょうくわうれを憊かくて有ある可べき事ことからねば一日頭取いちひかじりの久保何某くぼなんがし
 に面會めんかいなして筋すぢやかに自ら彼地かのちへ赴まむきて容子やすこを調しらべ來きたりたしと是等こゝろの事ことと談合だんがしな
 す又また兼かねて懇意こんいの交際かうかいなるに元來もとより情けを知る者ものなれば最い快まく諾うながひて公邊こうへん向むかは能よき
 やふに我われら繕つくろひ置おききに少しも早はやく彼所かのところへ赴まむき事ことの事こと否いなと糾たづなされよと云いふに突つきは
 打悦たいえつび直ただちに歸かへりて支度したくと調しらべ屋敷やしきの事は本家ほんけなる親族おやうぢ托たくまて中間ちゆうかんの小平せうへいを伴ともなひ出立
 し權十郎ごんじちろう等らが旅寓りょいうとせし彼伊香保かのいせほなる木暮きぼに到いたり具つぎに容子やすこと聞合きあするに一平いちへいよりし
 て聞きたる如ごとく別に替かりし事こともなきお愈途方いよくとほよ暮くれたりしが早はや此上こゝは故郷ふるさとへ歸かへる道中筋みちぢ
 を忍しのび聞合きあするより術すべを少しも小平せうへいよも心得こころえさせ木暮きぼを辭ひして引返ひかし人家いへと見れば立
 寄より云いふの一行いっけいが通行つうぎょうせまを知らざるやと一軒いっけん聞合きあする路傍ろぼうに茶ちやと煮ゆて旅人りょにんの
 足休あしやすまする茶店ちやてん乃すなはれば是こゝに憩いひし後の譚たなしは次の回くたぎと見て知るべし

○第拾七回

政之丞は召連たる中間小平と諸共只ある茶店に腰打懸先月廿八日頃年老たる武家と男女彼是五六人此邊を通行せしと見たりし事は有すやと問ふに老婆は頭を傾けさる御方の通られしや己れに絶えて知らざれ共慥か其頃柏木の山中道よて主従と覺しき者の二人まで切殺されて居たりしと通り懸りの馬方が問はず語りに聞しのみと云ふに何やら氣懸れ心主従言語を等しくして旅人の模様年齢を展く問ふに彼老婆は強く困却せし面色なりしが若し其旅人の事につき何か事由有る事なりせば村長方へ赴き玉ひ尋ね玉は、重聽せし婆が話説に勝こと有んと云ふ主従打懸頭道の方向を問ひ定め茶店を出ると其儘足を疾めて到り着き件の事由と云ひ込みしに臆て主個は立出て彼日の有様云く、と事遺漏もなく説き示し後日の證據も成もやせんと我儕が預り置たりし是等の品と見よと風呂敷包みを取出すに政之丞は氣も掛り疾封じめと押切は裏より山の樞十郎の着替の衣類なりしかば茲に始て章山の非命の横死を遂たりし委敷容子と聞知りて暫らく悲歎に昏たりしが恠て在る可き事ならねば我

等は江戸の小石川に屋敷と玉はる者として亡者の爲には通れぬ由縁の者ぞと告げ知らせ現在眞の仇敵と權次とさらに知らざれば假埋めせし寺僧と計り主従二基の石碑と修築跡念頃も吊ひ果て直ちも出立なしたれ共お宮等三人の生死存亡如何なりしや分らぬ故猶此所彼所と聞合凡そ半月餘りとは旅に於て聊かの便りも無れば詮方盡さ公邊向きの恐れも有ば一ト先江戸へ立歸り亦詮術も有らんとて力らなく故郷の屋敷へ戻り着きたれども肚裏に係る宗族の身の上片時も等閑ことならねば分別有者と語らひ此以降二三度旅立たせ近き邊りと搜索させしに絶えて踪跡の知れざるゆゑはや是迄と思ひ歎悟者途せし日と忌日と爲し追善佛事と營みて取果數年と消光とぞ話説分題茲に武州川越より三里隔ちし粕谷村と云ふ處に安樂寺と云寺あり住持は南光坊と云て年未だ三十路を過ぎざれども道德の間へ高く遠近の老若踰依そる者も多かりけるが住持南光の平日に圍碁を好みて消閑のすさみと爲すに寄り有徳の村人或は其道の達人等集り來り日毎に盤面と争ひ娛樂けるとぞ此南光が年頃不便を懸て教へ導く者に名を彩玉と云ふ小法師ありて年齢十才も足らざれど心づ



ま信實に師の坊の仰せに悖らず萬蔭日向なく立舉動程に南光は素より問ひ來る者皆彩玉を愛慈しみけり

○第拾八回

愆て或日の事なるが住持南光は彩玉して花檀の菊と手折せつ开を花活挿しながら
 莞爾と打笑て喃彩玉今日は山林の翁達が先度の勝負を定んどて晝過るより訪ふと云
 ひ越せしに今以て一人も見えぬは何した事の日がな一日働らき居れば汝も大義も有
 ふなれとチヨと一走り容子と聴直ぐに戻つて來てたもれと言ふも彩玉畏こみて然ら
 ば急いで行て參らんに臺子に白湯も沸騰てをり空右衛門後家より賞ふたる團子も彼
 處に仕舞ふて有れば若し其間も翁達が參り合なむれ師匠さま宜に計りて下されと言
 ひ懸けながら帯ひなほし疾外面へ出ると思へば蔭の忽ち見えすなるも南光は跡見送
 り未だ幼き子心にも師弟の義理と辨へて我に仕ふる殊勝さは大人も及ばぬ心へ寔
 り柔順いものじやなど浮世と棄て黒染の衣を着ふ身ながらも師弟となりし恩愛は又
 格別のものになんかゝる處ろへ立切たる折戸の外に聲有て「チト失敬のお訊問なが



ら安樂寺の和尚様がお住居なさるは此家ると言ふはまさしく女の聲もハテ何人が來
 たりしかと庭下駄穿て南光が自ら折戸と引明て「南光坊とは愚僧でおさるが何んの
 御用で愚僧と心お訊問なさる貴様はと訝かる南光さもよそと女は小腰を屈めつ、「
 御尤なるその言葉もど私は江戸生れ仔細あつて御當所の川越在へ身を落着しがな
 い糊口を立て居る三五郎の女房にてお宮とまふものなるが夫は先頃家出して何れ
 へもさしや皆昏知れずあどに残つた賤妾が女の細き手業にて漸やく露命を繋ぐうち
 従來重なる心痛が一時に打て出ましたのか何共分らぬ病氣となり御覽の如く獲れた
 る容子も無れど夜に入ば時を定めて苦しみ悶く世も稀なる病症と近所のお方が
 深切に遠くも無れば安樂寺の御師匠様にね加持と願へば確然全快致さうと教られし
 ど力にて態く御尋ね申しましたと言ふよ南光頭と掻き「开は最安さお依頼なが
 ら今日の生憎弟子さへ居らず殊に約せし人々の最う來會る頃なるに御身と愚僧と兩
 人にて同席に居らん事爪田の沓の恐れもあり祈禱と爲るには爲るやうに支度もあ
 りて一人よて事の調ふ譯ならねば翌日は是より赴きて望みの如く祈禱をす可きわ今

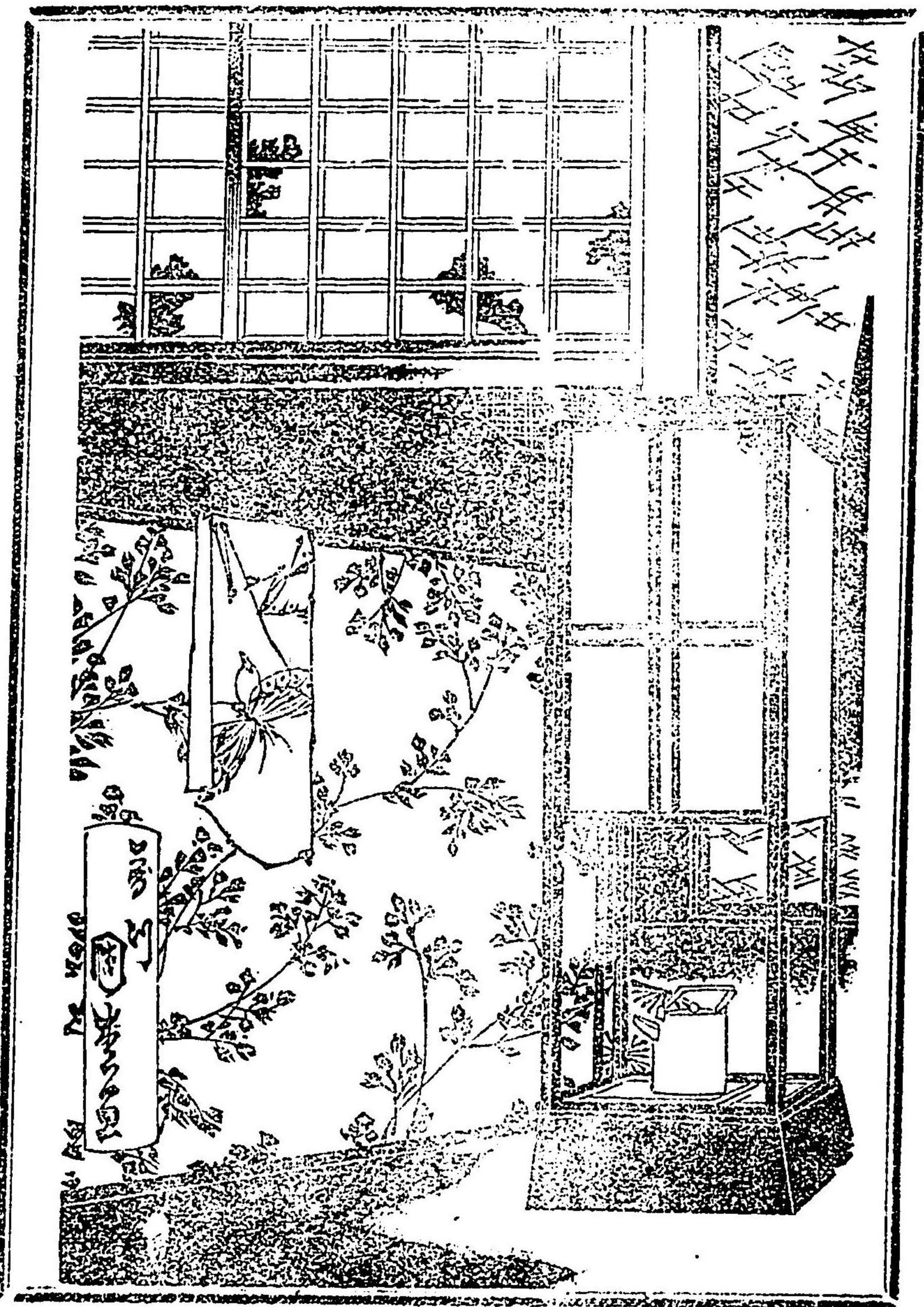
日よの此ま儘ま歸かへられよとすげ無なき和尚わうしやうが挨拶あいさつを流石まじがし強たても依たの囑まねば我が住すむ處ところと委く敷せ告つげお宮みやの猶なほも南光なんくわうも厚あつく依たの囑まて立た戻もどるを最さい前まへよりして彩玉さいぎよくへ木こ蔭かげに在あつて窺うかがひ居ゐりしが臆おそて其その場ばへ走はりぬで「お師匠ししやうさまの仰おつしやう見みつけ故いづつ一いつ散さん走さんり又また山林さんりんの翁おきな達たち方かたへ駈かけ付つしに此この方かたへ來きぬのも尤もつと千萬せんばん今日けふ地頭ちとうの役人やくにん衆しゆが田方たかたの檢見けんみに江戸表えどより大おほ勢せいお着つきなされたとて上うへを下したへと悶もん着ちやくし戰いくさひ所ところではふらぬからお師匠ししやうさまへ宜よろやうよ申まをして吳くれとの返事へんじとき、直すぐは戻もどつて參まをりましゑが逐つひに見みなれぬ女によ菩薩ぼさつとお師匠ししやうさまと相對さうたい話わ説せの腰こしと折をるまいと夫おつゆゑ今いままで椎しづの樹きの樹下じゆに遊あそんで居ゐりながら此この樣やうに捨ひつて來きましたと兩たもとの袂たもとを突つけて椎しづの實みあまた取出しす賢かしひやうでも何なに處ところやらが頑がん是こゝもないのも可か愛あいらしく億面たひめんの無なき輕口かろを南光なんくわうは、と打うち笑わらひ「又またしても彩玉さいぎよくか滑稽たはげ交まじりの使命つかひの返事へんじ夫おつで嘶はしは了解わかつたなれと未まだ未ま下し刻ときも成なるか成ならず秋あきの日脚ひあしの短みぢかくても暮くれるよ餘程よほどの間まもあれバ挽ひかせて置おきたと取出し汝おなた一いつ服ふく立たさせて久ひさし振ふりにて技て術じゆつと見みやうと云いふに彩玉さいぎよく頭かぶと下したげ「過あつ日ひ村むらの日待ひまちに呼よべ聞きて參まをつた淨璃じやうり瑠る山やま家が育そだちの數かず驚おどろきを何なにとやらして馬方うまかたが攫つらへたとやら云いふ通り何なにも知しぬ私わたくしにもお師

匠かさまのお蔭かげにて讀よみ書かき始はじめられくゝと教おしへて下くださる有あ難がたさ夫おつに付つても私わたしには何なに故ゆゑ親おやが無ない事ことやらいつぞはお聞きまをさうと思おもひながらも折をりなく、虛心こころく今日けふまで過すましたが何なにした譯わけでムリますかと云いふ顔かほ熟じよくく打うち咄はなめ南光なんくわう坊ぼくは歎なげ息いきして「其實じつじつの問とは道理ことわり至いた極ごく我われも汝おなたに物語ものがたる話はな説せは秩父ちちぶの山程やまぢり有ありなまじひ嘶わして聞きせても眞實まことの親おやを聞き出す便た宜いも無なれを徒いとらに苦勞くるわうをさせるが最いとしくせめて十五歳じよもあつたなら其その時とき始はじ終しまつと云いひ聞きせ方かたらと成なつて俱とも共どもに親おやを攫つらして引ひ渡わたし我が年とし來きたの願ねがひと果はたし汝おなたも安堵あんたふさせんとて口くちへも出でさず居ゐたなれと實じつは汝おなたは捨ひた子こにて思おもひ出でせば七年なな以前いぜん前まへ佛道ぶつだう修行しゆぎやう又また關東かんとうの國くにを廻めぐりて大江戶おほやまの忍しのぶが岡おかを通行たうぎやうし折をり若わかい女によが身みを投なげて死しなふと爲なるよ行い合あひながら空そらしく命いのちと殞おちさせて不ふ快くわい思しふうち不ふ斗とした事こともて其その女によの親おやに出い合あひ其その後のちに獨ひとりり故郷こきやうへ立た戻もどる修業しゆぎやうがてらの道みちすがら通かり懸かつた柏木かしきの山やまの霧きりにて女によの死し骸がはよとり着つて居ゐる子こ悴せがれが聲こゑと惜あはれまじ泣なむ餘あまりの不ふ便びんに見み捨すてらやねを欺たぶし賺ずかして扶たすけ曳里ひきさきへ伴ともひ兎うさぎも角かくも所ところの掟おきて法はよ任まかせんと漸やうく大おほ路ぢへ出でたなれと奈いなる過くわ古この因緣いんえんよや吾われが子この如ごとく思おもはれて別わかれども無なく煩腦はんなんの犬いぬの子こでさへ惡にくか

らぬに勝て三歳児の愛く、傲我を慕ひて父さまと云ひ因縁る、可愛さに到く此處へ連來り昨日に今日と花紅葉梢の色を染かへて疾や七歳の昔じとなる長の月日の心遣ひ察して吳よと云ひさして思はずはろりと袖に置く露のしら玉消ぬべき性命助かり其上より斯くまで厚き養育の實の兩親にもたち勝る南光坊の意中をさ、堪へくし溜め涙だはつと一、聲泣出せしが狭き袂涙を拂、然うとは知らず此年月我ま、氣儘よ其日を経過り大恩のあるお師匠さまへお世話やかされた勿体なさ其かはりには一生涯お側に在て今までの脊負て立れぬ御恩を返しよしや眞の兩親よめぐり逢ふ日がある有ましてもお師匠さまに別れていどうも心が濟みませねばいつく迄も此やうにお側におひて下されませと眞實見急し彩王が取繕るいぬ心底に南光坊も機嫌よく猶是かれとするうちに何某かたて竹ばら吹き湯の涌きたると知らするよぞ南光坊は聞付て此四五日の何かよ紛れおらだの垢も流さぬので何處もかしこも汚穢るしいからちよつと一、風呂もらつて來やうと彩王坊に跡とぬね手拭ひ片手よ立いでけり

○第十九回

白氏文集に天をも測つ可地とも測りつ可し只人のみ度り難し海底の魚も天上の鳥も高けれども射つ可し深けれども釣す可し獨心の相向る時咫尺のわひだも度る事能ず陰陽神變皆度りつ可し人間の笑は是怒なりとか云る如く寔に窺がひ知難は人の胸間なり見儲もお宮は斗すも大屋三五郎に出逢ひ悪縁の因縁る處竟に夫婦と成て不義の淫樂と盡たるに元來深窓に養はれ出で政之丞に嫁させる過失も無き婦徳を備し女性なりしに思ひ曲てお丸と恨み自ら悪道に陥しより種々の艱難に遭肚裏益々邪け夫三五郎と進めて善ぬ業と登させ政之丞が事最愛の一子が事をも思はず明暮三五郎と睦み樂み足曳の山狩する暇さ渡世も中々に心易く思て絶て愛とせずされば情夫權次と柏木の山中にて怪我打し此三五郎のわざなる事程經て之と知と雖も少も恨たる氣色も無く恰も漆膠の契と結びけるとぞ案下休題お宮は夫三五郎の世渡の都合は依り柏木の山中より川越在へ移し頃何より共無く毎夜更闌人靜まる時よ至れば物身忽ち發熱して心地死ぬ可く覺ゆるにぞ抑く奈なる病根にやと我も思ひ人み訝り手を替て色く々に療治すれどもさせる効驗も無きにお宮も困じ三五郎も苦しみ如何にもして



奇病を痊さんとすれども甲斐なく去迎別段疲勞も覺へざれば兎角して日數を消光うち是らの事の費へも殖え殊には博徒に交りて横みちの負債も有は銚かにお宮と談合なし路用を拵へ江戸へ出んと心構へと爲しけれども僅かの金にも手支へ居れば纏めた金の目的も就途方に昏し三五郎の耳に口寄せ何事にやお宮が歸さ示すと聞三五郎は大ひに悦び其翌日支度を調へ何處とも無く立出しが竟に夫切り歸り來ぬと慍る事とも知らざれば貸方はお宮に對ひ嚴しく債を促がすお宮の夫が家出を告げ振捨られし女の身よて多くの金の調達もる工風の就くまで今暫らくお待なされて下されと又他事も無く泣く泣く又貸方も皆手を延て夫が家出とせしと言へば开を無理にども言れぬを馴染も薄きお前方へ然ふべんべんども延をされねば少しも早く帰明けて戻し玉へと期と押て各々我家へ歸りゆくを仕濟したりと打悦び其夜も獨り打臥しが此頃少し遠退たる例の奇病が又々發し煩悶苦痛限り無く我と忘れて起直り見るとも無しに見返れを出居の障子に人影して臥房に來る者あるよぞ驚きながら聲懸て誰ぞと云ふに答へもせずスツツと立て恨めし氣に此方と白眼をむわりさま流石のお

宮もギョツとして恐怖見れをコハ奈に有し昔しに異なりて貴島お丸が髪振亂しいと口惜しき顔色にて顯はれ出しと見る物から思はず其所へ打伏して佛の御名と唱へつゝ、寢へ慄り居るうちに明行く鐘の響きと共に姿を消て失けるにぞ稍や生返りし心地して惣身の冷汗と絞り杯し僅かに勞と休めしが是より毎夜時刻も違へずお丸が亡靈立顯れ恨みの數く陳ると等しく一身渾て火の如く阿囀叫喚の苦まみも斯くやと思ふ斗りゆえ氣力も次第に衰へていと惱ましく見ゆるにぞ斯る奇病は神佛の力に借りるよ非ざれば容易よ本復なすまじければ安樂寺なる南光和尚は此近傍よて評判の智識の噂さ高けれお加持とお依頼なされよと進むる人の有けるに人には言れぬ事なれど己れが病氣の根本はお丸が遺恨の一念ならんと思ふ折から進めよ幸ひ或日自ら病若を推て粕谷村へ赴きつ南光坊と對面なし祈禱の事を依頼しかども其日は障はる事ありて空く我家へ歸りしが其翌日よ約せし如く南光坊にお宮を問ひ其病狀を聞杯して眞言秘密の祈禱と爲すに夫等のゆゑにや薄紙とはがすが如く痊りぬるに此頃よりして亡靈も再び出る事なければ全く南光が法力の世に著る業なるべしとお宮

は深く勞ひて倦る御恩と蒙りし其お報ひも足りませぬと女の手業で爲る事だけは
何なりとも御遠慮なくお爲せ被成て下されよと云ふ言の葉も悪のらねば南光坊と程
能く答へ衣類のはつれ洗濯物は彼渾てお宮と頼み折ふし物なと恵み興へ他事無き様
お見わたるうち是また道れぬ業因にやさしも老實堅固ある道徳高き南光坊が奈なる
天魔のみいりしかばかなき方に心と移し筋にお宮と姦通おし無量の快樂と執りし
より又一條の葛藤起る噺しの次回を見て知るべし

第二拾回

俗も安樂寺の南光坊のお宮が奇病の祈りを爲し其縁に據り情に曳れ出家の身に
まじき不義の契りと結びしより忘れんとするに忘られずお宮が面影目先に遮ざり我
を省みる心も無く雨風の折ども云す數く密會と爲しにぞ彩玉も漸く心付て淺間し
き所業を歎き奈にもして諫めといれ行状を方正させ平素の高恩を報へんと思へども
幼稚の身なれば云ひ出のね心ならずも日を經過に或日南光坊が法類にて保木間と云
る在方に急の用事の出来たれば委細の事を云ひ含め行程彼是三里に餘れば若し刻限

の遅くならむ彼所よ泊りて翌朝歸り來れど云ひ付て彩玉坊を出し遣り多分は歸り
來るまじと折戸と鎖して臥房にいり早くも枕に就きたりしが外面に誰やら聲低め頻
りにはどく打敲の若し彩玉のと思ふにぞ應と答へて帯ひさしめ庭に立いで打戸を
明ければ思ひも懸ぬお宮なるに且不審且悦び其儘手をひき坐敷に伴ひ「夜もはや太
く更たるにぞうして尋ね來られまや今宵の幸ひ人目も無く何んの遠慮も内くの雜
話は山ほど重なりたるに先寛ろきて語られよと云ふよお宮も會釋して「更ては淋し
き田舎みち一里にあまる處でもお目に懸ると樂しみよやうく歩行て参りましたと
云ひつゝ、ホ、と打笑たるよ南光坊は氣もそゝろに積る雜話も久し振り聞で寛々物語
らん此方へ來ませと先また誘ふ臥房の喜見城楚臺の夢と結びしのち前後も知らず
熟睡み居る枕を丁と蹴返してすつくと立たる一人の曲者白刃と壘へグサと差し驚き
慌て、起出る二人が襟首嚙手と取り冠りし手拭ひかなぐり捨兩個をハタと白眼まは
し「出家も似合ぬ非道の行状人も有ふに三五郎の女房を奪ひ好通するとは定めて覺
悟の上ならん又か宮めも其如く我が目を忍び賣僧めと斯ふした交情もあるならん命

ちはせうせ無ものと度胸を据ての事ならんに奴輩二人と重ねて置き四段となして塗
 れたる面の汚と雪のるから覺悟ひろげと云ひながら再び刃と振翳す遊刀の下立
 南光坊は聲振絞り「云る、趣き道理にて分疏すべし詞は無れと抑く是なるか宮に
 は夫あれども家出して何れへ行しや踪跡も分らず掛り合ひ無き單身と聞たる事も有
 たりし又儲は御身の良人あるか面目も無き此身の不所行刃の錆となる逆も聊か恨み
 は無れども茲にて兩個相果なむ南光坊ころか宮も通じ密會爲ま處とば夫に見かり殺
 害されしと後の後まで謠はれちば永却浮む瀬はあるまじ御身の腹立せらる、事決し
 て無理とは想はねど大慈大悲の佛顔もて此場を見遣し給はらば御身の顔の立やうな
 仕方は外も幾等もあらん茲の道理と聞分て助り難き兩個が命を暫らく兩個お預てよ
 と詫つ口説つ南光の喞言がましく演ずると三五郎は腮打反し髭搔撫て聞居たりしが
 漸くよして面貌を和げ「勘辨し難き仕義なれど今兩人と打殺さば却て世間へ我が恥
 と吹聴するに變らねば胸を擦りて此場はこの儘悶着あしし歸りもせんが然して人の
 女房を横取なした償ひの其首代は何して呉ると尻ひき捲り堂かど座したる面構ひ實

○第廿一回

小兇惡の曲者が女と餌に料りしとは云でも知るき當座の見相南光坊は後悔の臍と嘔
 めども是非も無く手函の裡より一包の金取出し三五郎へ遞與て只管陳謝を手に取り
 上げて重量と曳き竊かにか宮と顔見合せ微笑て懐ろへ収めて故意と聲荒らけ幻妻
 め一所にうせやアがれどか宮の手を執り引立て疊みざわりも荒々敷其座と立て兇漢
 毒婦が倖僥よしと點頭合ひ外面投して馳去けり

汝に出るものと汝にかへると宜なるかな安樂寺の南光法師はか宮が情けの畏れ野り
 不義の快樂を執りけるに悦び極まつて哀傷起り計らずも木夫三五郎が爲ま楚臺の夢
 を破られ既に一命をも失ふ可かりしと漸く首代の黄金をもて僅かよ其場を納め事な
 く濟したれども茲に我身と省り見れば幼稚のときより出家して難行苦行功積み積
 や一ヶ寺の和尚となり衆生濟度の任として凡俗よだにおとりたる汚れし所業に及び
 しは是はた天魔の所爲なりしか我身ながらも恨めしけれと慨歎悲泣に昏たりしが屹
 然肚裏の思案と定め料紙どり出し書遺す涙に、じむ薄墨の筆のいあびも力らなく漸

く二通を書終り「身から出たる錆なれば此身の最期は是非なけれど三ツや五ツの頃よりして手鹽又懸しおの彩玉何んよも知らず出行しが我身無らんろの後に歸り來たりて聞くならば歎きもせん恨みもせん开を思はぬにあらねどもなまじい命ながらへて人よ面と見られる毎に幾層の恥辱をうけんころ世に恥かしきことなれど斯くなり果しと會得し二いかなる人にも其身とよせ學問手習ひかたたらす天晴名僧智識となり父母のあり所もたづぬべく我身の後世も吊ひくれよ名残り惜まやといはゞぬいはで涙だの玉われれくたくる斗々打嘆きまがなみだを拂ひ容ちとあらため云ふて返らぬこの身のくり言どきおくれおば何かの妨碍すこともはやく然ふじやくと獨り言頓て佛間へ入たりしが暫らくありて經机ろの他の品を持出し机の上に書置きの二通とあらべ命掌なし戒刀すらりと引抜きておはや咽喉へ突たてんと覺悟さほむる折あるわれ庭の折戸と打敲き「こ、明てたべお師匠さまたゞ今かへりましたぞと言ふは正しく彩玉の聲とは知れどなまなかに此有さまを見せもせばごめ立せんは必定ゆか知らぬさまにて其袖もちつとも早く生害せんと再び乃ばと取り直す此とき早く



彩玉の死

彼とき遅くいつの間にも彩玉坊返事のなきを訝かりて要こそ有めと身を躍らま松のした枝より手をかけて其儘垣を飛び起しつ、慌たしく駆け來り南光法師が刃と持し其手に縋り聲ふりたて「お師匠さまは何もゑよこの彩玉へ斯うく」と事由も知らせず此やうも御最期なされますことか仔細とおわかしなさらず如何でも尊師と殺せぬ事由をおはなし下されよと一生けん命力らと盡し刃もぎ取り後邊へ取て投すて息せはしく涙ながらにおし止る匠思の彩玉が肚裏を汲て南光坊も泣じとすれどはふり落る涙の間に彩玉が面とながめて聲曇らせ「汝の恨の道理をがら是には深き事由あつて死なねばならぬこの身の業報真如の月の蔭くらく煩惱の海浪たちて佛のみちに背きたる世のみせしめに相ひて、せめては後世とたすからんとさてこそ憚る最期となす覺悟さほめし鮮なれば委細は遺せしもの書置わが亡きのちよひらき見て其一通は故郷の親の許まで届けてくれよ是をのつかりが汝への委頼とめ立あさず南光が志望とはたさせ潔ぎよく弘誓の船出させよやと因縁のなれぬ彩玉と取て押伏せ踏またがるにわれよくと聲たて、跛かへさんと憐れくと堂と押すを南光の刃を

どるにいとま無く死な後れじと思ひしかば手掛ひ執つて我どわが首と縋つちちからと極め左右に引けば無残やなウムとむかりに轉倒て其まゝ息氣は絶はてたるに彩玉坊は跛おきて空しき骸に身とよせ掛け聲と惜しまず打撃くなみだ阿彌陀のむらしぐれ晴まは少しもあらざりけり浩てある可きも有ざれば僅かに残る行燈の點火を搔たて彩玉は南光坊が書遺せし彼書置を讀み下すに往日始めてお宮に逢ひ奇病の加持と委囑れしが量らずお宮の情はだされついで踏迷ひ道ならぬ不義密會と透るうち今宵お宮にはしなく問はれ一臥房ある處と家出なせしと聞たりし夫が來り強面に掛合ひ詰しらの果が多く金の金にて漸くに濟せて其場は償ひしかど正しく彼ら夫婦の者が色も事托せ筒もたせの金をせしむる悪策と計較の種と見洞して今さら口惜しく恥かしく身と措きかねて覺悟ときはめ斯くの始末も及ぶありと筆の命毛たゑくに最もおはれに書留し終際の心押計り彩玉坊はいとゞしく悲歎のなみだに昏たりしが抑柏木の山中にて命は失ふ可りしてお師匠様も助けられ長の年月養育の御恩とらけた此身の体身の過失とは云ながら原由と糺せばお宮めが悪策に掛し事なればよしや刀は

當づとも彼らが爲にお命をお縮めなされた同様な九ツの代を替る其恨は深き師匠の仇讐やいか其まゝ、かく可きやと拳と擦り南光が戒刀取つて目釘をしめし現在師匠の怨敵は年頃尋ぬる母親とは神あらぬ身の知ざれば尻引からげ勇立表の方へ駈出す心の裡を哀なる

○第廿二回

借も安樂寺の南光は一旦の過失と強く悔ひて忽ち其身を屠らんと爲る處へ彼彩玉が歸り來り此場の容子に打驚き力らを極めて押ししが既にして覺悟を究めたる事なれば勢ひ制すること能はず三寸息絶えて萬事休す最も果なき最期を遂しよ其書置の文體にて事の起因を知しかば師匠思ひの彩玉か無念の餘り南光の戒刀腰よさえておく敵きは曩日お余所ながら見知りおしなるかのお宮定かお面貌は見ざりしかを兼て噺さに聞かよふ反甫稍盡の孤屋なれば是を直ぐに走り行き小腕ながらも師匠の響一ト太刀恨みて年來の慈恵と爰も返さんと幼稚ながらも武士の家も生れし權十郎一里あまりの畔みちと瞬くうちに駈け來るに折しも秋の最中なれば月の光りもある可き

に雨づゝみして夜の暗く我にもあらず行越して字繩張とよばれたる庚申堂の前まで來るに俄かにポツポツ降出したゝ見る盆と轉すがおどく面もむく可きやう無れば幸ひまゝの庚申堂少遷のれ間と待つべしととやる心と押しづめ喜連格子とおし明て頓て僅のに身を隠すに雨はますます小止なく雷もおどろに鳴いためきいつ晴べうとも見ざるにぞ彩玉坊と氣をいらち「師匠の響と復さんとて斯くまで心と盡すのよ雨と恐れて徒づらに時刻をうつすは本意にあらずいで一ト走り駈け付んと身支度なして出んとするよ誰とは知ず茫然と來る人あるに驚きて見付られては妨げと彩玉坊は身を潜まま息を殺して窺ひ居るとい脚のも知ざりけん表も來りし兩個の男女は濡たる袂を絞りつゝ、「明方までは大丈夫と思つた空が俄かに替り雨宿りする處もないのですつかり濡て仕舞つたが此雲切の工合では最ふ大しては降めへよと云ふに壹人も空と見て「思ひの外の大雨は路次の難義いさる事なれど人目を忍ぶ二人が身の上却て都合よなるのさど秘く語る男女の聲若しやと思ひ彩玉は喜連格子の透間から瞳を定めてさし覗けと素より如法暗夜となり雨また頻りに降來りて物の善悪も分らねば

はやりて事を過すつより容子を篤と聞た上ト太刀なりと師匠の警此場はやはか去せじと心のねたば磨すまし猶も潜みてあるうちにさしもの雨も漸やくに小降となつて八重雲も稍きれくになりしのは兩個は頓て帯直し身繕ひして立上り「人里離れた細手みち通り合するものなければ見顯ことはあるまいか和尚を恐喝た事柄が若し顯はれては面倒と先と括つた此欠落萬一人も知られては互ひの爲にならないから小止よあつたと幸ひに少しも早くも促したつるよ女も屢々點頭て「生れ故郷へ歸らふよも路用は素より貯蓄の少しも無いゆる云ひ合せとうく色に事よせてあの南光と欺賺こみ熱ひ涙とこぼして見せて漸く物した此お金と云ふと男は手を以て制し「何程聞人が無いとても壁又耳ある世の里諺余計な事と云はんより些ども早くも追立て等しく走り去らんとする後ろの格子と丁と明け「人と云ねを我言ふなど最前よりして汝等が問ず語りの悪計残らず聞た此彩玉處の名さへ繩張の庚申堂ではからずも居ながら敵さに出逢ふたのは神の恵みの佛の利益か其所一寸も動くなど年より優たる荒言吐き彼戒刀を引抜きて兩個が間へ突て入る思ひ懸け無き此場の有様不意を打

れて兩人も驚き慌て、左右に退き去るは是彼透を詠めつ、操縁ながら三人が暫らく挑み争そふうち「ッ」と叫びて三五郎が突出す拳に脾腹と撲れ彩玉坊は後の方へ堂と作る、透を窺ひ兩個の手と引合ふて跡白浪と逸失たり

○第二拾三回

逃る者の道を探ばすと借もか宮と三五郎は繩張堤の庚申堂にて彼彩玉と争ひしが兎悪不敵の曲者よ何ぞ當らん彩玉は矢庭に其所へ撲倒され悶絶なし、其隙に何處とも無く落行しに彩玉は心地つき我も返れど時遅れてはや奈とも詮方無れを泣く歸りて村長に今宵の始末を届杯迄南光が亡骸を葬り果て頓て人々を對ひ佛道修行の爲諸國を遍歴し師匠の菩提と吊ひ實の親をも尋ねたり由他事無く云出けるにぞ人々も彩玉が志望と憐れみ少し宛持寄り路用乏しからず調へ呉しかば淺からぬ恵みと悦び聞え馴て久えき粕谷と出しは文久二年の神無月よして十一才の時とか聞えし恁て野の寐山よ臥乏羈旅に夥の年を迎へ彩玉が十七歳の春世は維新と改まり萬機古へに復すの際に遇へ共三百年の治極まり幕府瓦解の時なれば合戦所々に起りて萬民安き心も

無しされば彩玉は幼稚の時より志操人に勝れ活潑有爲の者なれば近くは關の八州及び遠くは筑紫の果までも打廻り其年の夏大江戸へ來りて折節上野に戦争起り都下の騷動密ならねば親を捜索する時に有りと思ひ直し一回は粕谷へ歸りて村人とも面會なし曩日の悪みと謝せんものと急は敷走り去らんとして谷中へ出けるも今朝よりの戦ひにて死と究めたる彰義隊も外に援けの兵無れば數度の駈引合期せず惣敗軍とありしかば思ひくは落行もの引も切ず彩玉も之等の者に遮られて遠く走る事能はず如何せんと躊躇居るも古たる覆の元一人の武士夥の手疵に腦ひと見え息も絶げと慰ひて居りしが彩玉と見て聲張上げ「奈も御坊よ見らるゝ如き景狀にて殆難義と爲す者なるが一片の慈悲心を以て水あらば賜り候へと云聲も最枯くなるに彩玉と痛問敷思ふになん體て身邊に近付きて「近頃易きお依頼ながら見まいらすれば手疵と請られ歩行も難く見ゆ玉人に葉漏の露乃疵所入を山々敷大事お成らんも知れし誘玉へ何れの里も伴ひ進らせんよと甲斐く敷聞へるを武士は頭を左右に振り由縁も無き御坊の志しは忝け無れと抑く今回の戦争は三百年來御恩と請まき主家

へ盡す忠義とは云へ錦の御旗に對ては亂臣賊子の舉動なれを勝べき理由は素より無く斯く落人と成りたる上は争で命と助らんやあまじひながらへ死恥か、ば末代迄の瑕瑾なれば只潔く切腹して終ん事と願はしけれと立派に云と重疵の腦は吐息さへも苦しげなるに彩玉は左右見て「月矢の道に心と委ね名と惜み玉ふところは然る事なれ共君家の興廢定まらざる存亡一擧の場合も臨みか程の疵も屈し玉ひて命と殞し玉はんとは甚だ拙き尊慮ならずや叶へぬ迄も心と勵まし會稽山の恥辱と雪ぐと武士の本意と云ふべきのみ最女々敷も見ゆ玉ふと諭す言葉の凛々しさも彼武士の微笑「桑門の身も似合さる武士も及ぬ御坊の心操同様此場と落延て徳川恩顧の味方と集め今日の恥辱を雪がんと武く壯勇と身體の惱みと厭ふ風情なるも彩玉坊は眞實敷手を引立て五月雨の道の泥濘を扶けつゝ、人家と尋ねて立去りしが道の行先の七曲り往還より一丁斗り奥まりたる草屋あれば漸くよして至着零時門お佇立て裡の容子と窺ふに主個と覺しき壹個の男が椽へ立出空打仰ぎ「ナンボ入梅とて此様よ毎日雨の降事か夫に附ても今朝方より數度の軍に利と失ひ上野に御在の各位も儉落

延て此邊とお通なさると聞たりしが若し我家へ來玉は、徳川様の御恩と思ひ見事隠
匿申さん物をと獨言をば外方に最前よりして親ひ居兩人、筋に顔見合せ彩玉坊へ彼
武士を門は俟せて進み入り「是の諸國を修行なす御覽の如き者なるが今夕慮す此地
と通り徳川方の武夫にて手疵に惱む其人と見に忍びず伴なふたが旅は道伴世は仁慈
此大江戸に住はれて長く御恩と請らば徳川様への御奉公に零時間隠匿て下さる譯
には成まいかと言ふを開懸け主個の漢の俄に笑て小腰を屈め「开は甚敷御難義なら
ん見らるゝ如き茅屋なれ共虫より外も友も無き淨世離れた此一家か心置なく誘此方
へと眞實立延て納戸へ通し何呉と無く勦り呉る其心切に感歎おし彼武士も打寛き
今朝よりの疲勞を慰さめ頓て枕に就しかば彩玉坊も今更に振捨難く思ふに不俱座
敷に足踏延し我にも非ず熟睡しが夜半と覺し頃合ふ不斗目覺しかば起出て「奈に
勞れて居るにもせよ漫寤せしこそ鈍ましけれど云つゝ、立て圃へ行んと縁縁ながら次
の間へ出んどされば誰やらん囁く聲の聞ふるよぞ木にも茅にも心を措く落人の身に
係合ふ彩玉坊は耳ひら立息と殺して親ふに正しく以前の主個の聲にて「果報は寐て

俟つ里諺の通り思ひ懸けないよい鳥が然も二羽まで罹つたは此頃無い堀出し物先刻
兩個の雑話にも奥州筋へ心指すと云たを思へば懷中に路用の金も澤山有ん跡腹痛ぬ
血まぶれ仕事必ずぬかるな心得たりと云ふ聲は最低けれど同類らしき者さへ居て手
等と定むる趣きは手に取如く聞へしに彩玉坊は打驚き是は忽諸になり難しと直ちに
座敷へ引廻して彼武士をゆり起し詞短と云々と告く猶又耳も口寄せ斯々くあし
て此場を切抜け何處へなり共落行へしと恚る裡にも動せざる丈夫の性根を感じして
彼武士は身と起し彩玉坊は扶けられ臥房をはなれて椽側の程能き處に身構へなし今
や來ると俟懸けたり

○第廿四回

借も主個の身支度なし其同類と諸共に兩個が臥房を窺ひ寄り彼武士の臥たりし夜具
に跨り力量を究めグサと差ども手對無に訝りながら操練て「南無三風を喰つたのと
云ふ其聲を知邊にして縁の此方に俟懸たる彼武士が閃めかす又肩先切下られ阿と
叫て堂と座す程も有せず後邊より物をも云す武士の脇腹目懸て突蒐る刀の光りに身

と轉返す刀に碯と切るさしも手練の早業に是さへ重疵を負ひにけん同じ坐席も倒るゝ物音是彼俱に討留しと思ふ物から武士は聲振立て「ヤヨ御坊曲者共は討取つたり燈火是へ携へ給へと云ふを彩玉聞敢ず應と答へて納戸に入り雪洞手に持坐敷も來り重疵も屈せぬ武士の熟業を稱へて止ざるにぞ彼武士は打微笑「先刻御坊が云々」と告給はずバ奈よして此災難を逃る可き偏に御身が賜物なれ倍此家の者共が斯迄計議し事共は只自個等の私慾に出しか外は事由ある事あるか者奴等と糾問爲す可けれど云つ、兩個を引起すに壹人は此家の主個にして今壹人は女なり俱も重疵を負ひたれを息も絶げに見ゆれ共女は急所と外れしかば先此者より問糾んと彼武士は女の顔と差覗きしが愕然と驚きながら聲低め「アラ覺束な曲者の同類なりと思ひしは別れて年々経たりし我が女房には非ずやと云ふも此方も頭と擡げ暫く面と見て居しが「コハ我夫で在せしか面目も無き此身の成行吾兒の難病と痊さんと眞御諸共上野の伊香保の温泉も赴むきしに眞御様の不慮の御最期我兒の行衛も見失ひ悪者共の手籠に合ふ危急の場合へ來合せし思はぬ人に救けられ其所の日敷を經過うち小夜のふ

すまゝと重婚夫よ婦よと呼呼れ年頃諸處と呻吟て果は武藏の川越在に住家索むる其頃より稀有の奇病と煩ひて某寺の和尚を依頼此身の病本服の祈禱も事托せ云ひ寄りて終も夥多の黄金こしらへ今の夫よ伴はれ此地も足と止めしかば世渡る業の無儘も夫と進め彼是と作りし罪の報ひ來て今宵慮らず吾夫も廻り逢ふ瀬は有ながら知らず知られず挑み合ひ御手に罹りて相果る自から出たる鑄刀思ひ切ても切難る因縁づくよ侍らんかし最面なしやと繰返しくつ、身の詫と云ふも苦しき息の下傍へに聞し彩玉は忽ち其所へ躍り出懷るにせし戒刀とすらりと抜て立莞り「今日道伴に相成たるお武家よ由縁有る人とい今の咄しに聞たれ共夫等と厭ふ處るに非らず我が爲めは師匠の懲汝は其の夜夫と共に彼の地と逐電爲したれを跡の始末は知らずも有らんが我が師の坊は汝等が惡計に耻て敢へ無くもお果なされた口惜さ實の親にも優りたる大恩のある師匠の敵一太刀なりと恨まんと汝が方へ赴きたる途中に出逢ふ大雨と凌がん物と繩張の庚申堂にて小止を俟うち汝等夫婦の來りしを天の助けと欲付しに云甲斐無も打倒され其場を空しく取返し夫より此身も彼地を出佛道修行は名のみに



て竊かに汝が踪跡、ば尋ぬる月日も七年振り天運爰又循環して今社返す所の仇恨みの刀請て見よと名乗も敢て切付るを深手ながらも一生懸命お宮を左右に請外し消なんとせし燈火の火影は屹と面を詠め何思ひけん彩玉が手持添へて我を我が腹へ刀を突立てホト吐く息も苦るしく「喃珍らしや權十郎汝の爲に血と分たる實の母を見知らずやと云ふに彩玉膝立直し「我が現在の母なりとは何を證據に云るゝの權十郎とは誰人ありや我身も昔日柏木の山懐ろにて柏谷なる南光和尚と拾れて彩玉坊と呼れし外も名の無き物と云ふ顔と情打見て點頭ながら「三ツの年に別れし儘年月積りて十三年互ひよ面は替れ共残りま焼爛の其痕跡と何で忘れて能ひ物か愛惜のりしと操縦寄り彩玉坊が手を取つて只さめくくと打泣にぞ虎威脱て彩玉は詞も出さ差扣ゆるに最前よりして物を言はず手を拱て武士は歎息なして兩個お對ひ「我を狙ひて討んと爲し其曲者は女房にて其女房を警として心と尽せし彩玉は兩個が中に設けたる俸なりとは思ひさや此身の疵所に精神亂れ面忘れしぞ魯る奈も御坊御身が實の父親なる宍戸政之丞とは我事ありと始めて明す武士の猛き心も恩愛の涙に咽ぶ濁

み聲聞く彩玉は飛立斗り「借は御身は父上様か今日迄敵と狙ふたは身腹分たる母上様とは知る由も情けあやおとす涙の玉匣二親に逢ふ悦びも即座も替る歎きの海の深く盡せま彩玉が望みも水のうた方やわはれ果かさ一世の別れ路あな哀しやと聲立て泣崩折しが氣も狂ひ傍へ又置し戒刀を手に取り揚て脇腹へ突立んとする形状なるよ政之丞は其手と取り「コハ狼敗しか權十郎汝の母が年來の身の過失も我手も懼り爰に終らばせめてもの罪亡しになる耳か汝の手を添へ我が腹へ刀と措し、ハ云ずして汝が師匠の敵なれば自ら其身を殺し、了簡汝が健氣を健裏に感じ親と名乗べ師の仇を討まじ迎の事なれば汝に罪は脚無しと無理お刀と取んとすると「否殺さして給はれと憐れ拍子に倒れて居る主個の毘に厥けばウンと叫びて起直り政之丞等お打對ひ「善惡應報因あり果あり今二位の物語と夢の如くに聞知て四十餘年の非を悟る三五郎が身上とお聞なされて下されよと〇お丸に思ひを懸し事より放蕩のため親に追れ屋敷と出て上州の柏木在る在し時お宮が危急と助けし事權次を過ち殺せし事夫お宮に語りひ寄り川越在る南光を恐喝して得たる金と持ち此地又來りし事迄も漏無

く告て再び云ふやう今日官軍と徳川方と上野に於て鏢と削る軍の有ると聞しより御身等二人を落人と察して故意と念頃にて我家へ合藏たる事と路用を奪ふ計較よて其折か宮と近所迄使ひに遣りし跡なれば互ひも面と合さずして事疾や爰に及びしは是將皇天の誡めにてまだしも御身の手に罹らば少しは後世の護救を成らん道は欠たる三五郎が矢戸の寸志と云ふへ則と聞えし章山殿と殺害なしたる悪漢の權次とやらと誤討しは御身の爲に眞御の警を倒せし僥倖よて聊か罪を償ふたり疾く首討れよ矢戸殿と云ふ其理にも色替り其所へ合波と打臥て其儘息は絶果るるにお宮も是に後ればせじと這寄三五郎が刀を取り咽喉へグザと差貫き同じ枕に落入にぞ彩玉坊は是彼よいと嘆きは丈夫の腸と斷つ愛さ思ひ空敷骸に取付て泣哀しむと政之亟も道理なりと知りながら諫め勵まし容ちと改め「今更ら歎くはいと益なし親子稀く廻り逢へ共主家の大事と余所に去て恩愛痴情に縈縁なば弓矢の道の恥辱とならん此曉に此家と立奥州筋へ志し我は彼地と死處再び歸らぬ了簡なれば是が別れの對面なり御身は此地に残り居て名と立家と興しもして我が亡き跡を吊らひ吳よ云可き事

は是のみなるも勉めて其身を自愛して我遺言に侍りあせろ早打立んと勇み立てて手疵の流石苦しげなるに彩玉坊は推止め忠義も疑たる丈夫の思ひ込れし首途と女々敷止めはせぬけれを親子不思議に逢ひながら一日の孝も盡さずして此儘別れ申さん事いと遺憾哀しければ足手纏ひに共何卒吾身と伴ひ給へ若し伴はぬと宣はば此場と去らず刀に伏し眞土の魁け仕らん「开は聞分なし彩玉坊残れと云ふも親の慈悲父又如才は無き物を「イナお情けなし伴ひ給へと親子互ひも云ひ争ふ折しも門に聲高く「徳川武士の落人を此家へ合藏かく事と訴人有て確かに知るイザ尋常に繩懸れど壹人の武士走り入親子の間へ割て入るも此方の兩人驚きながら寄ば砍んと身構へるを「粗忽せられな矢戸氏某にて候はど冠りし笠を脱捨るに政之亟は面を見て「御身はお頭久保氏ならずやコハ「奈と訝る顔に然もこそ彼武士の威義を正し「借も今朝方上野もな兩陣頻りに打合しが穿は能衆に克すとや終に惣軍敗北して思ひくはに落行にぞ御身の在所を聞くに由なく我も思はず引立られ其所よ彼所と身と潜め辛くも逃れ來たりしよ余義なき些の事由有つて此家に暫時憩はんと最前門まで來りし

に裡みは夥多の人聲するよ何事やらんと耳立て夫婦親子の長物語りよ余所の歎きを我が袖も移して涙に昏たりしが廻り逢ひたる御子息を連じと云も無理ならず又連よと云ふ御子息の志しも便なれば其争ひの外漏れて人の聞なば不都合ならんと今の如くも聲懸けたるは聊か思ふ仔細も有て穴戸のにも御子息にも双方全き分別を疾く某が定めたりヤヨ其男來らずやと云ふをも俟ず壹人の法師が頓て其坐に推登り「絶て御目に罹らねばお見忘れもや遊ばしつらんお丸が父の嘉兵衛よて思ひ出せば十餘りはや四五年の昔しとなる娘お丸が亡なりし四十九日の其夕方壹人の和尚が我家へ來り慮らず入水の始末を听世を果なみて彼僧と導師と頼み誓り剃り折ふし殿より賜りたるお金を路用に故郷なる越路お立越へ此年月行ひ濟して居りましたが今年俄かに思ひ立彼國を立て兼て聞く川越在の安樂寺へ尋ね行しは跡月なりしが爰も不慮の事有て彼御僧も没命しと聞て今更打驚かれ跡吊ひて御當地へ亦もや呻吟來りしは昨日なりしに今朝より上野軍が始りし逆上と下へと騒動するに其側杖を打れじと漸く其所此所逃來りしに以前穴戸の御屋敷へお出入するをり御目に懸りし御

番頭の久保様に御出逢ひ申して御供なし或る田舎家に暫時が間休息なきて日と暮し再び出て歩行しかども持病の疝氣で掛せらねば少し疲れと休むる爲め向ふの家と頼みてやらんと忽休無も久保様の御前が賤しき私の手を引立て門口迄お連下され彼所に居て始終の事と伺ひましたか聞く事毎に胸どうつ重ねくの成行はて御隠居様も奥様も斯くの刀ばにお命とお縮めなさる、御身の終りお察し申上ますと鼻際りつ、陳しにぞ政之丞も打驚ろさ奇遇と感じて諸共返らぬ事を語らふうち東雲告る村鳥の聲さつつけて久保某は明り窓より外打詠め「親御と共に戰場へ行んど云る孝子とば止て許さぬ穴戸殿の意中は某推察せり今幸ひの助けと得たれば彩玉殿と嘉兵衛も托し此地に止め置れなば穴戸の家名は断絶せまじ又御子息よは穴戸殿の重疝と氣支ひ給ふと思へども是は某しも御邊と共に落行く目的は奥州なれば届かぬながら介抱なし我伴同して赴く可し奈に御子息彩玉殿聞分給へと説き分る理非判然たる久保某の詞よ各々領承なし去ば此間に落行可しと政之丞は支度と調へ路用を分ちて嘉兵衛に與へ彩玉の後見して家名相續頼むぞよと云ひつゝさらばと立上れども是や親子の暇

乞合點はしても彩玉が名残惜げに父の顔見上げ見下す兩個の心中思ひやれ共氣と勵まし久保の彩玉嘉兵衛等に會釋をなして表へ出るに政之亟も打連立外の方投して立出る一世の別の二世の縁妻は我より先立せ今また爰に三世の縁の家來と頼む吾兒の身の上云す語らず袂を分つを實は淺間敷は弓取の習ひにこそと嗟嘆して久保も頻りに目と拭ひ臆て等しく立去りしが是より數度の戰場にて兩人共に手強く働き若松の城没落せし日一ツ所に討死せしは是は是後日の談話なり恚て彩玉嘉兵衛は法師に諫められ父の遺言と貫くには遠俗なして廢れたる家名を再び興さんと權十郎と改めて本郷邊に居宅と構へ文學武藝を身と委ねしと素より有爲の壯年なれば幾程も無く熟達せし悦びは只之のみならず明治五年の秋葉月思ひ懸けなく或る省の官吏と成つて榮達せしにぞ祖父父母及び南光おさる其外權次三五郎等澤て一家を係り合ふ其人々の菩提と吊ひ今又其家繁昌せるとぞめでたし〜〜

輪廻因果遺恨悌終

明治十七年二月廿日 出版御届
 同 年三月十五日 刻成
 同 十八年三月廿一日 再版御届
 同 年五月十八日 刻成
 同 十九年六月十六日 別製本御届
 同 年七月 納本

(定價四拾五錢)

著作人

京橋區尾張町二丁目拾壹番地
 白井 則裕

出版人

日本橋區本石町三丁目十八番地
 嵯峨野増太郎

發兌

全所
 日 月 堂

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	其他名書林繪双紙店
鍋町	横山町	橋町	馬喰町	本石町	通三丁目	通四丁目	濱町	飯田町	本石町		
天狗書林兔	辻	鶴	山	明	九	泰	陽	榮	泉	泉	
屋	文	社	藤	間	鏡	堂	堂	堂	社	堂	

明治十七年二月廿日 出版御届
 全 年三月十五日 刻成
 全 十八年三月廿一日 再版御届
 全 年五月十八日 刻成
 全 十九年六月十六日 別製本御届
 全 年七月 納本

定價金四拾五錢

日本橋區本石町三丁目十八番地

出版人

嵯峨野 增太郎

全所

發兌

日月堂

大賣捌

天狗書林宛

辻

交

屋

鶴

社

交

山

藤

社

明

三

閣

丸

鐵

閣

春

陽

堂

菱

花

堂

榮

泉

社

金

泉

社

其他各書林繪双紙店

